
お父さんになっちゃった！？

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お父さんになっちゃった!?

【Nコード】

N8702I

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

「お父さん、今日からよろしくお願いします!」

急にお父さんになっちゃった大学生!

「さあ、紅ちゃん、僕の胸に飛び込んでおいで」

ようやく春が来てしまったロリコン紳士!

「……ち、ガキかよ……」
何やら影のある高校生男子！

「あらあら、またにぎやかになるわね……」
おしとやかな管理人さん！

「……私の紹介は？」
あ、ごめんなさい。
軒並荘の新人さん、成瀬紅！

その他もろもろ、楽しい住人たちが繰り広げる、ハートフルスト
ーリー！

第一話〜出会い〜

チチチ……と、小鳥達がさえずる音が朝の軒並荘に響いた。

「ん〜！つと！」

大きな伸びと共に、軒並荘のきなみの管理人さんが箒を手に玄関に出てきた。

軒並荘は築何十年のオンボロアパートだが、それでも小綺麗なイメージがするのは一重に彼女のおかげだった。

「ういつす……。管理人さん、相変わらず朝早いつすね〜」

そんな軽い口調と共に玄関に出てきたのは、高校生ぐらいの男の子だった。

髪はぼさぼさ、髭は伸ばしっぱなしなので、いつもよくて大学生、悪くてフリーターと間違われる。

「あら、そういう圭吾君も、いつもなかなか早いわね？」

「あ〜いや、俺は早起きとは違いますから」

「またまた〜謙遜しちゃって！」

「ははは……」

実は彼、大星圭吾は管理人さんと少しでも長く話がしたいからこうして眠い目をこすりながらも起きてきたのだが、管理人さんが彼の真意を知るのはまだまだ先のようである。

「……みんなはまだつすか？」

「ええ。もう一時間しないとみんな起きてこないわよ。まだ6時だからね」

「そうつすね」

彼はなんでもないように言っているが、心の中ではガツポーズだ。

『おしっ！あと一時間は誰にも邪魔されず管理人さんと話せる』！

彼の胸中を言葉にするならこんな感じだろうか。

管理人は簿を休めることなく会話を続ける。掃除と会話との優先度が同じということから望みがあるかどうかわかりそうなものだが、彼はこの時に限っては鈍かった。

それだけなら、まだよかったのかも知れない。

彼は毎日しているように管理人さんと他の住人達が起きるまで会話を楽しみ、いつものように不健全な不登校生活に戻るのだから。

しかし今日は彼の毎日の楽しみは阻害されることとなった。

「……………あ、あの……………」

そんな、控えめでかわいらしい声と共に。

「……………うん？」

彼、堂野たんの 好助こうすけは外に出ようとして不意に気配を感じた。

今までこの軒並荘には縁のなかった存在だったが、それを彼は嫌悪することはなかった。

「……………あ、あの……………お、お父さん、知りませんか……………？」

「うん、僕が君のお父さんだ、今まで会いたかったよ」

彼は廊下でいきなり訊ねて来た女の子の問いに即答した。

もちろん、彼は彼女の父親では断じてない。断じてないが、とにかく部屋に連れ込みたかったのだ。

「……………あなたは、違います……………」

子供は人の悪意が簡単に見抜けると言う。彼女もその例にもれず、いともたやすく彼の悪意に満ちた嘘を見破った。

「……………ふむ、仕方ないね、君のお父さんの名前を教えてくださいらん？」

僕が知っていたら紹介してあげるよ」

無理強いはいしない、それが彼の信条なのが彼女にとって救いだっただろう。もし彼が暴力をふるうことにためらわない人格だったらいまごろ彼女は彼の部屋の中、だ。

口調は紳士、内容は変態、子供には優しい、それが彼を表す言葉だった。

「……………大瀧おおたき流りゅう……………です」

彼女が発した名前に彼は、

「……………ひゅう」

と驚き、そして、

「その人は僕の隣人だよ。嘘を言ったりはしていないから安心してよ。僕は君みたいな幼い子が好きで好きでたまらないけど、乱暴はしないことにしてるんだ。……………ほら、すぐそこだよ」

彼は自分の部屋のすぐ隣を指して案内するように言った。もちろんその時肩に手を回すのを忘れない。

「……………あ、あの……………ほ、本当に……………？」

「ああ、本当さ」

彼に後押しされる格好で、彼女は自身の父親がいるという部屋の前に立ち、そして……………

ガチャ。

「ひゃうー!？」

インターフォンをならそうとしたところで、ひとりでに扉が開いた。

ちなみに、というか当たり前だがこのアパートは自動ドアではない。

つまり、誰かが開けたのだ。

誰か？

「……朝っぱらからなんすか、堂野先輩」

全体的にだるそうな雰囲気。顔つきは悪くはないのだろうが、そのけだるそうな雰囲気全体を台無しにしている気さえする。そして服装もTシャツにジーパンというファッションのファの字も考えていないような格好だ。

「……あ、あの……大瀧流さん、ですか……?」

そうか細く聞こえる質問で、ようやく父親であろう男は視線を彼女に向けた。

「……ああ、僕がそうだけど……君誰？」

君誰？

それは、軒並荘の管理人さんが発した問いである。不登校高校生である大星圭吾が発した問いでもある。

そして、彼女はその問いにこう答えていたし、今回もそれに外れることはなかった。

「わ、私、成瀬^{なるせ} 紅^{こう}と言います！

お母さんに言われて、お父さんを頼りに来ました！」

平和な平和な日常が続く軒並荘。
その平和と日常に変化がもたらされた。

第一話〜出会い〜（後書き）

こんにちは、作者のキノハです。

この物語は基本的にはコメディで、ところどころに真剣なお話が入ります。

毎日更新を目標に頑張りますので、応援よろしくお願いします。

軒並荘のほのぼのした生活をぜひ、お楽しみください。

では、駄文散文失礼しました！

また次回！

第二話〜記憶〜

「成瀬……紅……ちゃん……？」

大瀧流は、呆然とした表情のまま、彼女が名乗った名前を反芻した。

「ねえ紅ちゃん、君はいくつなのかな？よければ僕に教えてくれないかな？」

さながら狡猾な誘拐犯が子供に警戒心をとかせるような優しい声色で好助は言った。

「……十歳、です」

警戒心を解いたわけではないが、彼女の父親であろう男は未だ固まっているので、それを訊いてくれるとは思えなかったから、彼女は答えた。

彼女の幼いながらもしつかりとした警戒心は、自身の肩をいやらしい手つきで触る堂野好助と言う男に自分の情報を与えるべきではないと警鐘を鳴らしていた。

「ふう……ん。ま、ちょっとふけ気味だけどいいかな……？」

紅は今までかつて『大人びている』と言われたことはあっても、『老けている』とは言われたことがなかった。

おそらく好助の判断基準だと、十歳以下でないと相手にする気はないのだろう。

紅は今日ほど早く誕生日を迎えたいと思ったことはなかった。

「……えっと……僕の……娘？」

「はい！……多分、そうだと思います……」

最後に自信がなくなったのは、もし人違いだったらどうしようという不安が彼女の中でよぎったからである。

「えっと……僕ね、その……君に言ってもわかるかどうかかわかんないけど……その、したこと、ないんだ」

「性行為をですか？」

「「!？」」「」

好助と流は同時に驚いた。

「き、君のお母さんは何を教えているんだ!？」

十歳といえばまだコウノトリやキャベツ畑を信じているような年頃なはず。しかし、紅はどうも耳年増なようだ。

「『変な伝承教えて間違った知識を植え付ける訳にはいかないわ。あなたにはまだ早いとは思うけど、知っていて損はないし、いずれ誰もが知ることよ。』

……それに、何かあったとき、自分がなにされているか理解できなかつたら嫌でしょ』

……お母さんはそう言って私に教えてくれました。そのおかげ

で今まで理解できなかった男の人の行動が理解できるようになりました。……吐き気がしますが」

後ろの好助を睨みつけて紅は言った。

「うっ……」

パツと肩から手を離すが、紅の視線に親愛の情がまじることはなかった。むしろ敵意がましたぐらいだった。

「えっと……知ってるんならわかるね、君と僕とはその……」

「思い出してください。お母さんいつもいつも言っていました。」

『あの人は私の一番よ。一番最初で一番最後で一番好きな人。すべての一番に、あの人がいるの。……あなたも、高校生ぐらいになったらわかるのかしらね？あなたが高校生になれるかどうかかわらないけど……』

でも、もしなれたのなら、恋をしなさい。私とあの人が出会ったように、あなたにもきつといい人が現れるわ。あなたの『一番』になる人が、ね』……って」

高校生。

一番。

すべての、一番。

流は思い出していた。というかなぜ忘れていたのかわからなかった。

『ねえ、私とあなたはさよならするけど……あなたは悲しくな
んかならないわ』

彼女の声が再生される。

『そんなことねえよ。俺はお前を忘れねえ。忘れるもんか』
彼の若い声彼の頭の中で再生される。

『いいえ』

厳しい断定。

『あなたは私を忘れるわ。……忘れなきゃダメ。ダメなの。私は、
……いいえ、もう何も言わないわ。このまま別れましょ』

そのとき彼女が何を言いたかったのか、彼には分らなかった。

『いずれその時が来るまで、あなたは私を忘れる。……いいわね
』?』

その声が、彼の記憶に蓋をしていたような気さえする。

「……深紅しんくの、娘？」

「そうです！成瀬深紅の娘、成瀬紅です！」

記憶から覚めた流は、今一度目の前で自身の娘を名乗る少女を見
た。

髪は黒くて長く、後ろでくくってまとめている。

目は深紅に似て聡明で、ガラス玉のよう。

全体的な顔立ち、雰囲気。そして何より。

「『あなたの心、あなたの命、あなたの身体は私の物。……思い出してくれたかしら？』」

お母さんはお父さんに会ったらこう伝えてくれて、言っていました」

その伝言があまりにも彼女らしすぎた。

ここまで一緒だったら、もはや疑いようがないとも言える。

「……君が、僕の、……むす、むす、」

けれど、だからこそ。

「……？」

「耳をふさぐんだ、紅ちゃん」

好助の警告空しく。

第二話〜記憶〜（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。

すみませんがこの物語は日曜日は更新されません。日曜定休日です。

どうしてもギャグ成分が必要な方は『三人のフィアンセ!?!』で満たしてください。

シリアス成分（そんなのあったか!?!）をお求めの方は『兄妹の想い』でどうぞ。

上記二つの小説は毎日更新しています。

身勝手な定休、まことに申し訳ございません。

では、駄文散文失礼しました。

ご愛読感謝、また次回!

「わ、私、成瀬紅です！お父さんの娘です！」

ちゃっかり自分が流の娘だと主張するあたり、つくづくよくできた娘である。

「ああ、それで大瀧君は叫んだ格好のまま固まっているんだね？あはは、実におもしろいな、なあ、好助君？」

「ええ、ものすごくうれいす。今まで女つ気のなかった軒並荘にようやく紅一点が……って、今のしゃれじゃないですよ？」

ちなみに、これは補足だが。

軒並荘には管理人さんのほかにもう一人高校生の女の子がいる。

だが、人の価値観は様々、それこそ千差万別である。自分が欲情できない人間しか女性と認めない人間もいれば、それに加えて幼女好きというどろしよもない人間も世界にはいる。確実に少数派だが。というか少数派でなければ困る。

そして、その少数派のひとり、軒並荘の『無毒』、堂野好助だった。

彼は紅がくる前はただ『幼女が好き』とほざく無害な男だったが。

「……ふむ、君はどうやら『無毒』の名を返上しなければならぬみたいだね。今の君は危なっかしすぎる」

「別に構わないさ、そんな名前ぐらい。唯一の星に出逢えた僕は、どうあっても抑えることなどできやしない。絶対に僕好みに教え込んであげるよ」

さっと紅は身を引いた。その程度で助かるとは彼女も思っていないが、どうやったたら自分の身体を守れるか、彼女の頭はいまだかつてないぐらい考えていた。

1・逃げる。

どこに？却下。

2・戦う。

どうやって？却下。

3・通報。

その考えが浮かんだと同時に、スカートのポケットから携帯を取り出し、110番をプッシュ。

「あ、あの、警察ですか？あの、私少し、いやかなり貞操の危機なんです。……相手の名前？ええっとたしか、堂野好」

「すみませんでしたー！！」

一瞬で三メートル離れ、廊下にでこをつけての土下座。

「……あ、もういいです、危機は去りました。では」

笑顔で電話を切った紅は、そのままの表情で平謝りの好助に近づく。

「お母さんいつも言っていました。『男の弱みを握ったら、掴んで離しちゃだめよ？男ってのは弱みを晒すのを何よりも恐れてる生

き物だから』って。……意味、わかりますよね？」

「は、はい！わかります！」

もうなんかどつちが子供なんだかわからないぐらい立場逆転した二人。

というか紅のお母さんって何を吹き込んでたんだ？

未だ精神が現実世界に戻ってこない流を除いた全員（二人しかない）が思った。

「じゃ、私にしちゃダメなこと、わかりますよね？」

紅自身も自分の身を護るのに必死だ。でも必死になればなるほど口調が冷静になり、思考力が上がるって本当によくできた娘である。

「は、はいはいはい！わかります！わかりますから、どうか、どうか警察だけはご勘弁！」

「……しかたないですね。勘弁してあげます」

まさしく嫌々、と言った風を装って紅は言う。好助が調子に乗らないための演技だ。本当に、紅のお母さんって何を吹き込んでいるのだろうか。

「お、お父さん……？ぼ、僕が……？」

ようやく硬直から立ち直ったかと思えば、彼の口から出てきたのは疑問の言葉。

「そ、そうですね！私、あなたの娘です！」

変態を成敗するのに躊躇はしなくても、父親に自分の存在を認めてもらうのには、少しばかりの躊躇があるようだ。

もし、人違いだったら？もし、言い過ぎて拒絶されたら？

そんな不安が彼女は拭えない。いくらできた娘とはいえ、彼女はまだ十歳になったばかりなのだ。

けれど、誰もがそれを認識しなかった。

思考は成熟しているかのように見える。 自分の意思をち

やんともっているように見える。

それは当たり前だ。彼女の母親がそう見えるように育てたのだから。

だからこそ、誰もわからなかった。

「う、嘘だ……！」

つい、出た言葉なのだろう。彼を責めることはできない。

ある日いきなり『あなたの娘です』と言われて受け入れると言
う方が無茶だろう。

そんなことぐらい、まともな思考をしている人間なら誰にだっ
てわかる。

「……………っ!」

誰もが、成瀬紅もその『まともな思考をしている人間』だと疑
わなかった。

「紅君!」

だから、紅が流の言葉を聞いて、ショックを受けたような顔に
なって三人のいる廊下から走ってどこかへ行くとは、誰も予想して
いなかった。

第3話〜拒絶！〜（後書き）

こんにちは、作者のコノハです。
今日から土曜まで、テストです。
期末です。

期末の後は学期末の授業です。

なので、期末終わるまではこの『お父さんになっちゃった!?!』
はお休みです。

すみません。二週間全部開けることになってしまいました……。

でも、来週の月曜日は絶対に投稿します！

では、駄文散文失礼しました！

ご愛読感謝、また来週！

第4話 涙！

「……っ！わ、わかって……いました……っ！」

消え入るような紅の声は、軒並荘の共用リビングで発せられた。体力的にはまだまだ走れるが、精神的に彼女は打ちのめされていた。

リビングにある共用テーブルに腰掛け、突っ伏する。涙を隠そうと、腕を組んだ間に顔を入れる。

一気に玄関まで駆け抜けて、路地裏にでも住もうかとも考えたが、彼女の母親が危険だからやめときなさいと言っていたので、すぐにその考えは捨てた。

「わかって……いました……っ！お、お父さんが……私を、否定、することは……っ！」

母親が言っていたから。彼女の行動、思考力のほとんどは母親の模倣でしかなかったのだ。子供の世界は両親と自分以外はなく、そして彼女も、そんな子供の内の一人だった。

「……紅、ちゃん」

泣いている彼女に声をかけたのは、管理人さんだった。

紅はハツとなって顔を起こし、ゴシゴシと乱暴に涙を拭った。

「な、なんでもありません！き、気にしないで、ください……」

「……お父さんに、何か言われた？」

それは疑問と言うよりは確認だった。管理人さんは紅が何か言われただろうとある程度は予想していた。

「……嘘だ、って」

「え？」

聞き返したのは、紅の声がかすれて小さなものだったからだ。

「うっ、嘘だ、って！つい、っていう感じで嘘だ、って言われたんです！うくっ、ぐすっ……」

仕方ないことなのかもしれない。いきなり父親になれと言われて、ハイそうですかと返せる人間がどれほどいるだろうか。

「わかってました、わかってたの！ぜ、絶対に拒絶されるって、わかってた！だ、だから！悲しくなんかない！苦しくなんかない！」

涙を流しながら、紅は自分に言い聞かせるように叫ぶ。

「私が、私は幸せになれないことなんて、わかりきったことだったのに……」

それは、わずか十歳の少女が悟るにはあまりに悲しく、哀しい事だった。

「それなのに……」

心底不思議そうに、けれどどこまでも悲しそうに、少女は呟い

た。

「どうして、期待してしまったのでしょうか……?」

そこまでが管理人さんの限界だった。

「ひゃう!?!」

急に抱きすくめられて驚く紅を無視して、彼女はギュッと力を入れる。

「……紅ちゃん」

「な、なんなんですか……?」

管理人さんの瞳は潤み、今にも泣き出しそうだった。

紅にはなぜ彼女が泣き出しそうなのか理由が全くわからなかった。

「あなたはきつと幸せになれるわ。大丈夫」

「……私に、幸せは似合いませんよ」

ゆっくりと、紅と管理人さんは目を合わせる。

管理人さんの茶色の瞳は紅に、紅の漆黒の瞳は管理人さんに、互いを確認するように見合わせた。

「私が、絶対にここに住まわせてあげる」
管理人さんの口からでたのは、強い意思だった。

「え……そんな、迷惑……だと思えます」

申し訳なさそうに、紅は言った。

「大丈夫。私を信じて」

強い意志を灯した瞳。

「……でも……」

「大丈夫」

そう何度も言う彼女に……

「……はい」

紅はようやくやく折れた。

途端に管理人さんの顔が明るくなり、いつもの優しそうな彼女に戻る。やはり彼女に沈んだ表情は似合わない。

「じゃ、呼んでくるわね」

「え？」

力強い微笑と共に、彼女は階段を上がっていった。

第五話く想い！

彼　大瀧流は肩を落として激しく後悔していた。

「ぼ、僕は、あんな子供を、しかも自分の娘を、傷つけた」

「悪気があったわけではないのだろう？なら大丈夫だよ。ちゃんと筋を通せばね」

がつくりと肩を落としてうなだれる流を、好助が励ました。

「……筋？」

頭を上げて、流は訊いた。

「そう、筋。傷つけたのなら謝る。それが人の道理というものだ」

「……好助さんって、意外と古風ですね……」

「うん？そんなことはないさ」

そう言つて何故か胸を張るのは、二十代前半のお兄さん。

「まだまだ現役だよ？」

その言い方がもうなんか古い。

「……とにかく……僕は、どうすれば……」

「だから、謝ればよいのだよ。家族……なんだろう？」

おちゃらけた感じはまだ抜けないが、それでも真面目な表情を作る好助。

「……家族」

眩くように、流が言った。

「そうさ。家族なんだ。君と成瀬深紅との間に出来た……、
……深、紅？」

好助の様子が、変わった。
鋭く恐ろしい、獣の目に。

「……成瀬に……深紅……間違いない」

ぶつぶつと二十代前半ロリコン紳士な好助が女の子の名前を繰り返すなんて、めったにあることではなかった。

「……好助、さん？」

「……はっ、……なんだい？」

今気付いたと言うように、好助が元に戻った。

「ど、どうしたんですか……？」

まさに恐る恐るといった風に、流が訊いた。

「いやいや、気にしないでくれたまえ！少し昔に同姓同名の幼女がいたものだから気になってね！幼女が幼女を産むなんて実に萌

えるシチュエーション」

「あんた結局それだけか！」

流の叫びが軒並荘の廊下に虚しく響いた。

「……あらあら、随分とお楽しみですね？」

それとほぼ同時、妙齡の女性が下から上がってきた。

「……管理人さん」

「やあ、管理人さん」

上がってきたのは管理人さんだった。なぜか少し怒り気味だった。

「二人とも！なに大の男が女の子泣かしてるの！」

腰に手を当てて、眉を吊り上げて、かなり本気で怒っているらしかった。

「……あの子、泣いてたのか」

流の後悔がさらに深くなる。

「ま、泣くだろうね普通は」

わかったような口ぶりで、好助が言う。

「はるばる会いに来た父親に『嘘だ』、だからね。泣いてるのが済んでいるのが不思議だよ」

「でも！僕は別に悪気があつたわけじゃ……」

「悪気があるうとなかるうと一緒にです！」

言い訳をしようとした流を、管理人がピシヤリと切る。

「な……」

「いいですか、あなたは父親です！」

「え？でも、その、証拠が……」

「心当たりがあるんでしょう？」

逃げようと必死な流を厳しく問い詰める管理人さんは、まるで
彼らの母親のようだった。

「……はい」

「紅ちゃんにその人の面影とかないの？」

「……あります。めちゃくちゃ彼女に似てます」

「……それでも、娘じゃないって言うんですか？」

管理人さんの鋭い言葉に、流は黙り込んだ。

沈黙が流れる。

「お父さ……流、さん」

その沈黙を破ったのは、目を赤く泣きはらした少女、成瀬紅だった。

「……紅ちゃん」

管理人さんが、幼い彼女の名前を呼ぶ。

呼ばれた紅は管理人に何も言わないまま、何か決意を秘めた目を彼女の父親 - 大瀧流に向けた。

「流さん」

「え……」

もう彼女は、流を父親と呼ばない。

「私、帰ります。人違いでした。ご迷惑おかけしました」
ぺこりと頭を下げ、笑顔で彼女は言った。

「あ、ああ……」

流は紅の急な態度の変化についていけず、呆然としている。

「……じゃ、みなさんも、お騒がせしました」

ぺこりと頭を下げてそんなことを言う彼女には、もう先ほどまでの涙ぐんでいた子供の面影はない。

今の彼女は自分を抑えることができる、大人だった。

「……では」

それが当然であるかのように、紅は軒並荘から去ろうとする。

「ま、まって紅ちゃん……」

管理人さんの制止に、紅は反応した。

「なんですか？」

「い、いいの？あなたのお父さんかもしれないし、流さんだつて認めるようなことを」

「人違いでした。それが全てです」

冷静に、何も気にしていないかのように、紅は言った。

今度は無言で、軒並荘を出ようと階段を下り……

「この先君は、どうするつもりだい？」

「お母さんのところに、帰ります……」

今までハキハキと答えていた彼女が急に、齒切れが悪くなった。

「お母さんのお家がどこにあるかわかるのかい？」

好助は珍しく真剣な表情で彼女に訊いた。

「……………」

紅は黙る。

「わかるのかい？」

もう一度、好助は訊いた。

「……わかり、ます」

陰鬱に沈み込んだ顔を隠すように伏せて、何かに耐えるように言った。

「嘘だろう？」

好助は断じた。

「違います！」

紅は力の限り叫んだ。

その強い否定に、三人共が驚く。

「そうなの？」

管理人さんが驚きを隠しながら訊いた。

「じゃあ、どこにいるんだい？」

好助が不思議そうに訊いた。

「……海を超えた先のどこかに、いるはずですよ」

また、沈黙が4人の間を支配した。

第6話 父と娘

「……君は、……もしかして、その、お母さんの居場所を、知らない？」

「知ってます！海の方こうにいるんです！それだけはたしかなんです！」

紅は今にも泣きそうな目で流を睨み付ける。

「海の方こう、と言うだけでは居場所を知っていることにはならないよ。」

「……それにしても、どうしてそこまでこだわるんだい？」

好助は疑問を口にした。誰よりも先に、紅を気遣うように。

しかし、その気遣いは意味をなさないどころか、この場合は逆効果だった。

「どうして？どうして？どうしてですって！？あなた、わからないんですか！？私は、お母さんに捨てられたかもしれないですよ！海外に行くこと以外なにも教えてくれず、まるで、厄介払いみたいに……っ！」

あまりに悲痛な、紅の叫び。

「それは……違うわよ。きっと、紅ちゃんのお母さんはあなたを危険にさらしたくないから……」

「今までお母さんはどんなところでも私を連れて行ってくれた！私だって何度も死にかけた！でも、それでも、私を置いて行くなんてこと、今までなかったのに！」

管理人さんの優しい慰めも拒絶して、紅は叫ぶ。

「私は捨てられたんです！弱いから、見限られたんです！それなのに、お父さんかもしれない人なのに、その人にまで否定されて！私はこれから一体、どうやって生きて行けばいいんですか！一体どうやって……」

その声にあるのは、困惑、疑問、不安、恐怖。

いつしか目じりには涙がたまり、そして、ポロリと一筋。それが、きっかけだった。

「……うく、こんなのもつて、ないですよ……！私、死ぬしかないじゃないですか……！うく、流さん、お願いです、ひっく、娘じゃなくていいですから、こき使ってもらってもかまいませんから、どうか、うっく、どうか、」

……助けてください……」

「……紅、ちゃん」

流は、つぶやくように名前を呼んだ。

彼の中にあるのは、後悔。

こんな子供にこんな思いをさせた悔み。

こんな子供にここまで言わせてしまった悔み。

そして、怒り。

こんな子供をほっぽり出して海外に行ってしまったかつての彼女に対する怒り。

そして、こんな子供を傷つけてしまった、自分に対する怒り。

「……僕は、……僕は」

最初は驚いた。

その次に否定してしまった。

でも、まだこの子は手を伸ばしてくれている。もし次この手を振り払ったらもう二度と、手を伸ばすことはないのかもしれない。

こんな子供がいくらこのご時世とは言え、一人で生きていけるかと言えば、否だ。

攫われるかもしれない。殺されるかもしれない。餓死するかもしれない。

……こんな子供に、そんな苦痛は与えてはならない。

流は、うるんだ目で、不安交じりに、半分期待しながらもどこか諦めた表情を見せる紅を、いや、自身の娘を見て思った。

「……僕は、いや、紅ちゃ、いや、紅は、僕なんかが父親で、いいの？」

「私は、生まれた時から、あなたの娘です。……お母さんに、そう言われてきました」

涙が止まって、少しだけ希望を見出した紅は、それでも不安な表情を拭いきれずに答える。

心の中ではちゃんと笑顔を振りまいて好印象を持ってもらわないと、と母親から教わった打算的思考もしているのだが、それでも今は本当の、素のままの自分を見て判断してほしいと紅は思った。

「……さつきは、悪かった。その、戸惑っただけ、なんだ。……紅、ぜひ、うちに来てほしい。狭い部屋だけど……」

その言葉を、紅はずっと待っていたのだろう。

「はい！」

たちまち元気になった紅は、さっそく、娘が父親にするように抱きついた。

「……むづう、いい終わり方なのはわかるけれど……嫉妬するな」好助がぼつりとつぶやいた。

紅は父親に抱きついたまま好助の方を向き、

「べえ〜！私はあなたみたいな人になびいたりしません！残念でした〜！」

子供らしい純粋な笑顔で、そう言ったのだった。

「……そうか。まあ、笑顔が見れたからよしとする、か」
「そうですね、好助さん」

管理人さんにも、かすかな微笑みが戻っている。

「……紅、これからよろしく」

「うん、お父さん！」

ようやく

いつもの軒並荘の穏やかな雰囲気に戻ってきた。

第7話〜提案〜

「……ふむむ？なあるほど。よくよくわかった理解した。つまりは、だね」

朝7時。いつもなら朝食が並べられ、皆が他愛ない会話をする共用リビングは、緊張の糸が張り詰められていた。

「成瀬紅、つまりお譲ちゃんは母親から言われて、ここに居る苦学生である大滝流を頼ってきた、ということだね？うん、うん。そして一度は決別したものの、和解し、今こうして卓を共にしている」と

こうして説明口調で話しているのは恰幅のよい中年男性。小説なんかを書いているが普段は部屋にこもりっきりのダメ中年である。

その割には男連中……つまり大滝流や大星圭吾、そして堂野好助にはかなり信用されているようで、彼にいつも相談事を持ちかけている。

「は、はい！え、ええと……」

「私の名前かい？私の名前はおおつきよる大月夜。大きな月の夜と覚えてくれればそれでいい」

「はい、大月さん」

「いや、夜でいいよ」

「いえいえ、目上の人には敬意を払えとお母さんが言っていますので」

「私が目上？……ふふふ、嬉しいことを言ってくれるね、お譲ちゃんは」

好助が浮かべるような嫌らしい笑みではなく、本当に優しげな微笑みをたたえて、大月は言った。

「……えと、えと、あの、その、ええっと……」

しどろもどろになりながら何かを必死に訴えようとしているのは、目元を髪で隠し、容貌のほとんどが隠れてしまっている高校生ほどの少女だった。

「言いたいことあるならはつきり言え。いちいちどもるな」

「え、で、でも、圭吾、君」

「お前に圭吾君と呼ばれる筋合いはねえ」

不登校の少年大星圭吾は彼女に冷たい。常にびくびくとしていて頼りのない雰囲気。彼をそうさせるのだろうか。

「こら、圭吾君。女の子には優しくしなきゃだめよ？」

「……はい」

管理人さんに言われて、不機嫌そうになりながらも「わるい」と謝るあたりはまだ優しい方なのだろう。

「……で、何なのかな、蛍ちゃん」

おがわ
ほたる
小河 蛍

軒並荘の二人目の高校生であり、登校拒否の女子生徒であった。

「えと、あの、その、りゅ、流さん」

「なに？」

「あ、あの、失礼かも、知れませんが、その、あの」

しどろもどろになりながら、でも蛸はちゃんと言った。

「あの、流さんって紅さんを養える、のでしょうか……？」

ピシリ、と石のように固まって石像と化したのは、訊かれた流だった。

「大丈夫だよ！お母さんはお金いっぱい持ってたし、お父さんもきつと……だよね？」

ピキリ、と石像にヒビを入れたのは期待いっぱい父親に訊く紅だった。

「ハン！紅、現実をよく見た方がいいぜ。こいつ一年近く管理人さんに家賃待ってもらってるほどの貧乏野郎なんだからよ。期待はするだけ無駄、ってやつだ」

ピッキーン……………。

とどめを刺したのは、圭吾の突き付けた現実だった。

「お父さんのこと悪く言わないで……」

「悪くは言ってるねえ。事実を言ったまでだ。……つつか紅ならわかってんじゃない？お前頭いいだろうから」

「で、でも……」

「でも、つてことはわかってんだろ？先輩んどこに住まわせてもらったら？なんでだか先輩は金だけは持つてるからな」

「そんなことしたら私の貞操の危機です！」

「……そうだった。悪い」

「いいんです」

ちなみにまったく信用されていない好助ががつくりと肩を落としたが……自業自得なので放っておこうと、すでに住人たちは決めていた。

「まあ、私が言いたかったのもそこでね。流君にはお譲ちゃんを養えるだけの財力があるのかどうか……ないだろうね。いや、あったらおかしい」

サラサラ……

もう砂になってしまった流は、もはやなにも言わない。

へんじがない、ただのしかばねのようだ。

「……私が、稼ぐもん」

「へ？」

みんながみんな、そんな感じの疑問符を頭の上に出した。

「私が稼ぐもん！稼げるもん！お父さんの家賃の延滞だって滞りなく返せるぐらい稼げるもん！稼いでみせるもん！」

「……ええと、だね、お譲ちゃん。圭吾君も言ったように、現実を見てみようか。お譲ちゃんはいくつ？」

無茶苦茶なことを言い出した紅に、優しく大月が諭すように言う。

「10歳」

「そう、10歳だ。で、お父さんの延滞、どれくらいのお金がいるかわかる？……昨日でちょうど百万円だよ」

「百万……！？」

ガーンと、ショックを受ける紅。この年でそのお金の重みがわかるとは、なかなかにできた子供である。

「……じゃ、じゃあ、私やっぱりこのまま追い出されちゃうんですか……？」

「う、……い、いや、そんなわけないだろう？意気込みは買うけど、無理だっということを言いたかっただけだよ。いや、だからそんな捨てられそうな子犬みたいな顔しないで！話聞いて！」

紅の懇願するような表情に、大月はついあせってしまった。

「コホン。つまりだね、君にはお手伝いさんをやってもらおうかと思って、ね」

「お手伝いさん……？あ、メイドのことですね！」

ちなみに。

この時メイドと聞いて、男連中が想像したのは秋葉原に居るような完全にそっち系統の客を狙った服装のメイドであり、女性の方々が想像したのは屋敷に仕えるちゃんとしたハウスメイドである、という想像の違いがあつたりもする。

「ああ、そう……かな？まあ、近いものではあるね」

「なら大丈夫です！私、お母さんと一緒に少しの間だけだけどやったことあるから！きつとつまくできるよ！」

「それなら安心ですね。よろしくお願いしますね、紅ちゃん」

「はい！」

「……え、なんとかなったの？」

「」「」「」「」「」「」「」

やっと硬直から解けた流は刺すようなみんなの視線を浴びることになりましたとさ。

ともかくこれで、本当に。

成瀬紅が、軒並莊の住人になった。

第8話〜相談〜

「……………あ、急がなきゃ遅刻だ！」

まるで痛々しい視線から逃げるように、今まさに子供の養育能力がないと軒並荘の全員からダメだしされた彼は、大慌てで自室に戻った。

「……………つたく」

吐き捨てるように圭吾は言ったが、その表情に敵意はなかった。いつものことなのだろう。

「……………お父さん……………」

自分を養ってくれるのがお父さんではないと知って、少しだけ残念そうに紅はしているが、つぶやきの理由はそんなものではなく。

「……………今までどうしてきたんだろ？」

純粋な疑問だった。

「あいつ俺らから金借りまくってんだよ。いいか、紅。絶対にあいつに物ねだるんじゃないやねえぞ、百円のものでも破産しかねえからな」

「……………うう、大丈夫かな、お父さん……………」

少々大げさに圭吾は言ったが、紅はまるで疑うことなく彼の言葉

を信じている。

「まあ、大丈夫よ。紅ちゃんに関しては私たちも面倒見てあげるから、ね？」

優しい口調で管理人さんが言った。

「……………ありがとうございます」

心底申し訳なさそうに、紅は言った。子供らしいと言えば子供らしいのかもしれない。

いったん会話は途切れ、リビングは静寂に包まれる。

「……………ふむ、管理人さん」

「なんですか？」

大月がふと気付いたように管理人さんに話しかける。

「この子の学校、どうする？」

「……………そうですね、……………」

管理人さんは指を顎にあて、何やらしばらく思索する。紅はと言うと、学校？という感じで首をかしげていた。

「おい、まさかとは思うが学校を知らねえ、ってわけねえよな？」

「あ、はい。お母さんが行っていたところですよ。……………でも、私が行くんですか？」

「何疑問に思っ
てやがる。ここは日本で、学校に行っ
てねえガキなんていねえんだよ」

「……圭吾さんは？」

そう紅が訊くと、しまったというように圭吾は顔をそらし、そっけなく答えた。

「俺は別だよ！学校になんざ行かなくても十分なんだよ！」

ますますわからない、と言うような顔を紅はしたが、その疑問を彼女が口に出すことはなかった。

「そうですね、私がなんとかします。近くに校長先生に顔の利く学校がいくつかありますから、多分大丈夫でしょう」

「ありがとうございます！」

紅はとんでもないことを言いだした管理人さんに疑問を持つことすらなく、お礼を言った。

「いや、少し待とうか。……君が言うその方法は、法には触れないのかね？」

「……？」

「いや、紅。なんでてめえはそこで首をかしげるんだよ」

「だって、この世界は知恵と人脈と力が全てでしょう？」

「んなわけあるか」

「だって、お母さんがそう言ってたし、それに、私もそう思ったもん」

「一度紅の母親と一対一で話がしてえな……？」

一体娘になんて教育をしているんだ、とここの全員が思った。

「……と、とにかく、大丈夫なのかね？」
「はい、大丈夫です」

断言する管理人さんに、怯えやひるみはなかった。

「……じゃあ、大体話は決まったみたいだね？じゃあ紅ちゃん、お着替えの時間だよ？」

「……！」

ぱつ、と紅は好助から飛びずさった。身の危険を感じたのだ。

「……どうして、逃げるんだい？」

「……目が、怖いです」

「気のせいだよ。僕はここで『無毒』なんて呼ばれちゃうほどのジエントルメンなんだよ？……ふふふ、さあ、紅ちゃん。一緒にお着替えしようか……お兄さんと一緒に！」

がばあ！と、まるで獰猛な動物が獲物をとらえるときのよう素早く、しかし正確に好助は迫った。

「……け、警察呼びますよ、警察」

「呼んでみたまえ！僕は国家権力に屈しはしない！」

「屈してください！」

ピ、と携帯を取り出し、110をプッシュしようとして、

「あっ！」

「ふふふ……」

好助は神速を超えて紅の携帯を取り上げた。

「あ、あ……」

後ずさる紅。

「ふふふふふ……」

追い詰める好助。

ここで間もなく犯罪が行われようとしていた。

「いい加減やめやがれ変態ペド野郎！」

「好助さんダメです！」

「好助君、さすがにシャレになってない！」

「だ、ダメです……」

べき、ぐしゃ、ぼき、めきよ。

好助は四人によってたかって殴られ蹴られ、管理人さん達は好助が虫の息になってようやく、リンチをやめたのであった。

「あ、あの、だ、大丈夫、なんですか……？」

「大丈夫だよ。こいつはてめえがいる限り死にやしねえ。これぐらいやってようやく大人しくなるくらいだよ」

「ど、同意です……」

「私も同意だ」

「わ、わわ、わわ私も……です……」

まあ、自業自得なのだからしょうがないと言えはしょうがないの
だろつ。

「……ありがとうございます」

こんなやりとりさえも、紅には新鮮で面白いのだろう。

お礼を言った時の紅は、きれいに微笑んでいた。

第9話〜新しい日に〜

「それにしても……紅君」

「なんですか？」

恰幅のよい中年男性、大月夜がポニーテールの少女成瀬紅に尋ねる。

「君は一体……今までどうやって生きて来たのかね？」

「……？」

「いや、簡単な話だよ。少しだけ、君の言葉の端々に普通の子供とは違う雰囲気を感じたからね。訪ねてみただけだよ」

紅はもしかして自分は変に思われてるんじゃないだろうか、と思ったが、実際にはそんなことは全くない。ここ軒並荘の住人は大なり小なりの理由で一般とは離れているので、他人をどうこう思うような人間は少ない。……紅の父親である大滝流はその例外ではあるが。

「……私はなんにもしていません。お母さんについてただけで

……」

「そうかね。……ではお母さんは何をしていたのかわかるかい？」

「……いえ」

短く、紅は答えた。

「……てかさ、夜さん。そんな尋問みたいなことする意味あんの？」

大星圭吾は大月に咎めるような視線を向けた。紅は今ようやく自分の居場所を手に入れたところなのだ、ともかく今は安心させてやりたいと思う、彼の優しさからの言葉だった。

「そ、そ、そうですよ……夜さんらしく、ない、です……」

普段自己主張をしない小河蛸さえも、珍しく他人を責めるように言う。

「……たしかに、少し意地が悪かったか。ごめんね、紅君」

「いえ、大丈夫……です」

「敬語なんてガキが使うなよ。……ったく。ガキはガキらしくしてろ」

「え……」

紅は圭吾が言った言葉がにわかに信じられなかった。

「何疑問に思ってたんだよ。お前はまだ十歳のガキだろうが。もっとガキらしくしてろ、ってんだ！」

「……はい、……うん」

「そうだ。それでいい」

もしかしたらこの人、口は悪いけどすごくいい人なんじゃないだろうか……。

「……そ、そそそそそ、だよ……？……多分、そう……だと、思っ……？」

「ああ、もう！いちいちどもるな疑問形にするな！うっとうしい」

「……………は、はい……………」

蛍に強くあたる圭吾を見て、あ、やっぱり違うや。と思いなおす紅であった。

「……………学校のことは私にまかせといてね、紅ちゃん」

「うん、ありがとう」

管理人さんはやっぱり優しいな。と、改めて紅は思った。

「……………」

紅は一度、周りを見渡すように視線を一周させて、深呼吸をする。今ここに居ることが嘘ではない、夢ではないと自分に言い聞かすかのようだ。

「……………みなさん、私なんかを受け入れてくれて、どうもありがとうございます」

今、彼女は幸せだった。

父親である大滝流。理想通りの父親と云うわけではないけれど、それでも十分尊敬できた。

このアパートの管理人さん。彼女の優しさで、紅は大いに救われた。もし気遣ってもらえなければ、今ここに紅はいないだろう。

大月夜。その名の通り全てを優しく包み込む夜のような懐の大きさで、紅の存在を認めてくれた。

大星圭吾。口は悪いけれど、他の住人と同じように、紅のことを気遣ってくれる。

小河蚩。おっかなびっくり、ほとんど自己主張をすることはないけれど、それでも確かに紅には尊敬するべき人間の一人だった。

……堂野好助。今後の一番の心配事は彼だけれど……。本気で排除しようと紅は思わなかった。なぜなら彼だって紅のことを一度は守ろうとしてくれて、身を案じてくれたのだ。尊敬、信頼はできないけれど、恩は感じている。

いろんな住人達。その全ての顔ぶれに、紅は親しくなれる気がしていたし、親しくなろうと努力するつもりだった。

「……私、今日から軒並荘に住むことになりました、成瀬紅です。これからどうか、よろしくお願いします」

ぺこりと、一礼。

みんなが微笑み、その笑みで自分はここに居ていいのだと、改めて紅は実感した。

やがて日は沈み、夜になり、皆が眠りにつき、そして……新し
い朝が始まる。

第10話 ぐにゅぐでいずー

?? 彼女、成瀬 紅は朝五時に起床した。小学五年にしては早起だが、彼女にとってはいつものこと、どこるか寝坊した、と思うほどであった。そこから考えると、彼女の早起きの理由は几帳面、というよりは体に慣れ親しんだ習慣、と言った方が正しいだろう。

?? 「んーっと！」

?? 彼女は起きてすぐ、大きな伸びをした。と、同時に、いつもと違う事がもうひとつふたつ。いやもつとたくさんあることに気がついた。

?? 「じじ……どじ……？」

?? 寝ぼけ眼をこすりながら、彼女はむにゃむにゃと呟いた。

?? 「おかーさん……？」

?? ふうふうと頭を彷徨わせながら、彼女は自身の母親の姿を探す。けれど、見つからず、彼女は放心したように肩を落とした。

?? 「……あ、そう、か……」

?? そこではじめて、紅は自分が母親のもとにいないことを思い出した。母親に言われるまま父親がいるという軒並荘に転がり込んだのだ。

?? 「……おとう、さん」

?? 紅は隣でくーすかと寝息をたてて眠っている自身の父親……大滝 流を見つめた。

?? 大学に通っている普通の青年。その普通さ故に一度は娘ではないと否定されたが、最終的には、認めてもらえた。

?? 認知してもらった、っていうのかな？おかーさんはそう言っていたし。

?? 彼女は幼心にそう思った。やはりまだ小学五年、母親の言葉や信条が全てといったところか。

?? 「……おーたき、流。おうたき、流。おおたき、流。大滝、流。大滝、流」

?? 紅は父親の名前を幾度となく繰り返す。必死に覚えようとしているのだろうか。

?? 「流、流……流お父さん、流とーさん。……どれがいいだろ？」

?? どうやら呼び方を決めているようだった。随分と長い間父親を見つめながら名前を呟く姿とはなんともシユールで、ある意味では恐怖さえも醸し出しかねないが、今はそれを感じる人間も、ツッコミをいれる人間もいなかった。

?? 「ここは普通におとーさん？……でも……」

?? 可愛くないなあー、と彼女は思った。

?? ……まあ、いいや。呼びやすかったらなんでもいいや。そもそも、可愛さよりも、呼び安さをじゅうしするべきだよね！

と、心中で思う彼女には、呼び方になんらかのこだわりのようなものがあるらしかった。

??「リユートさん、とか面白いかも……?」

??りゆうと(う)さん。

??なかなか奇抜な発想を持った少女である。

??「でも、でもなあ……」

??うーん、と彼女は悩む。しばらく悩んだあと、答えを出した。

??「……管理人さんにそーだんしよつと!」

??思い立ったが吉日、彼女は管理人さんに会うため部屋を飛び出したのだった。

??「うーん……むにゃむにゃ……」

??彼女の父親はついぞ、呟く娘に気づかなかった。

??とところ変わって軒並荘の軒先。

??管理人さんはもう起きて玄関先の掃除を始めている。

??

??サツ、サツ、サツ、サツ……

??一定のリズムで途切れる事なく掃く音は続く。

??

??「ふう……」

??少しの間手を止め、ため息を一つ。

??少しだけ表情を曇らせ、管理人さんは軒並荘を見上げる。

??「……私は……」

??その先を、彼女は飲み込んだ。先が思いつかなかったのか、それとも言つてはならないと自粛したのか。

??「おーい！管理人さん！」

??もし後者だったとするのなら、彼女は正しかったと言えるよ。

??「あら、紅ちゃん」

??「おはようございます！」

??かわいらしくぴよこんとお辞儀をした新しい軒並荘の住人、成瀬紅を見て、にっこりと微笑んだ。

??「紅ちゃん朝早いね。眠れなかったの？」

??「早いかな……？私、今日寝坊した、って思ったぐらいだよ？」

??「……あー……」

??管理人さんは時々、紅はここに来る前に一体何をしていたのか小一時間ほど問い詰めたい気持ちになる。あまりにも常識を外れた紅の常識に、驚くところもあるし、恐怖を感じるところさえある。

??もし私が予想もつかないような恐ろしい常識がこの子の中にあ

つたら……？

??時々、彼女はそんな不安にかられるのだった。

??「あのね、あのね、管理人さんに訊きたいことがあるの！」

??純真な子供そのままの笑顔で、紅は言った。その笑顔に管理人さんは少しだけ安堵した。

??「なにかしら？」

??また重要なことだろうか。また父親に何かを言われたのだろうか……。管理人さんはそんなふうになんか身構えて、紅の質問を待った。

??「あのね、お父さんのことリユートさん、って呼ぼうと思うんだけど、どうかな!？」

??「はい？」

??管理人さんはあまりの突拍子もない質問に、ついそう言っただけでまっていた。???

第11話 怪しい人たち！

?? 「え、ええ〜っと、紅ちゃん、どうしてリユートさん？」

?? 「だって、流お父さん、なんて呼びにくいし可愛くないじゃん！リユートさんだったらかわいいし、呼びやすいでしょ？」

?? 「う、ううん……？」

?? 管理人さんは首をひねった。その呼び方は可愛いというよりかっこいいではないだろうか？そんな考えが頭をよぎる。が、ここは紅の好きにさせてあげる事を彼女は選んだ。

?? 「可愛いかどうかはさておいて、紅ちゃんの呼びたいように呼んだら？」

?? 「うん！」

?? 玉のような笑顔で紅は頷き、ありがとー！と言って軒並荘の中に入ってしまった。

?? 「……朝から元気ね、ほんとに」

?? 「本当っすね」

?? 「あら、圭吾君。おはよう」

?? 「おはよっす」

?? 寝ぼけ眼をこすりながらわざわざ起きて外まで出てきたのは、高校生ぐらいのチャラチャラした少年、大星圭吾だった。

?? 「管理人さん、今日はいつもにまして綺麗っすね。思わず見とれちゃいましたよ」

?? 「うふふ、上手なんだから。褒めてもなんにもでないわよ？」

??「そうでもないっすよ」

??「そうかしら?」

??「はい。俺は綺麗なものは綺麗だと言う事にしてるんで、気にしないでください」

??「……ふふっ」

??軽薄な若者言葉を使う彼を、管理人さんは悪く思っていなかった。悪ぶってはいるけれど、根は優しく、生真面目なことを彼女はよく知っていたからだ。

??「で、なんすか、あいつ?」

??「どうしたの?」

??「いや、昨日あんなにおどおどして鬱陶しかったのに、今日は朝っぱらからバタバタ走ってやがる。なんかあつたんすか?」

??「きつと、安心したのよ。自分はここにいていいんだ、って一晩かけてわかったのよ」

??「ふうん……」

??「バタバタする子供は嫌い?」

??「ガキはガキらしくしてりゃ、それでいいんすよ。今のあいつは昨日よりよっぽど好感持てますよ」

??口調はなんてことないようにいっているが、顔は赤い、目は泳いでる、明らかに照れていた。もちろん管理人さんにそれを指摘するかしまいかまよったが。

??ふふふ、可愛いわね。

??胸中でそう思うくらいに留めておくのだった。

???

?? ヒーヒーフー……。
?? ヒーヒーフー……。

?? 短く卑しく怪しい呼吸音がさわやかな朝の部屋に響く。
?? 一切の明かりを締め切った部屋の中央に、一人の男が鎮座していた。

?? ジョーキ…… ジョーキ…… ジョーキ……。

?? 軒並荘の『無害』と呼ばれる男が、異常なまでにギラついた瞳で、一心不乱に生地を断裁していく。

?? 目は赤く光り輝き、口からは短い呼吸が何度も続く。

?? ヒーヒーフー…… ヒーヒーフー…… ヒーヒーフー……。

?? ジョーキ…… ジョーキ…… ジョーキ……。

?? 無心で、無言で、一心不乱に生地を裁つその姿は禍禍しく、その二つ名には全く、似つかわしくなかった。

?? なぜ、急に彼が豹変したのか？それは趣味嗜好が変わった訳でも、危ないクスリに手を出したからでもない。

?? 彼が今まで無害だったのは彼のタイプの年齢に適する女性が一人もいなかったからであった。そして、これが重要なことなのだが、彼のタイプとは。

?? 「ああ…… 紅ちゃん……」

?? 十歳以下という、どうしようもないものなのだ。まあ、よつするに彼はロリータコンプレックス…… わかりやすい言い方をするな

らロリコンなのだ。彼自身は、自分はただちっちゃん子が偶然タイプだっただけで、それを罪にする社会が悪いんだ、うんたらかんだら……。そういうどーしよーもない言い訳で理論武装しているのだ。

??「ヒーヒーフー……ヒーヒーフー……ヒーヒーフー……」。

??短い呼吸音。

??「ヒーヒー……。で、できた……」

??「ばつ、と、彼は断裁し、裁縫した布を掲げる。その詳細がよくわからないのは、何も部屋が暗いからではない。」

??「ヒヒヒヒヒヒ……アーヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

??「さながら魔法使いのように、彼は怪しく笑った。」

??「彼の目には、昨日あたらしく入居してきたタイプの女性……成瀬紅が浮かんでいた。」

??「リユートさん、リユートさん……っ!？」

??「午前六時。昨日父親に教えてもらった、大学の登校時間が近づいていたので、紅は父親を起こしていた。その時、不意に全身に怖気が走った。」

??「……なに、これ? なにかよくないことが起こる……?？」

?? 急に走った怖気の意味をはかりながら、紅は周囲を見渡す。

?? 「……………誰もいない。きのせい、かな？」

?? そういつと彼女は警戒をといた。ある意味では気のせいではない。壁一枚向こうでは、堂野好助が自身のためになにやら作っているのだ。もし警察がその光景を見たなら間違いなく職質を通り越して逮捕に踏み出すであろう形相で作業をしているのだ、となりにいる紅が何かを感じ取っても不思議はない。

?? 「……………う、ううん……………」

?? 「あ、リユートさん！おはよう、」

?? 「リユートさん……………？」

?? 紅の父親、大滝流は目覚めていきなりそう呼ばれた。

?? 「うん！流父さんだから、リユートさん！かわいいでしょ？」

?? 「……………かわいい？」

?? 「かわいくない？」

?? 「いや、それ以前に、普通にお父さんって呼んでよ、」

??

?? 彼は本来ならそう呼ばれることさえもないはずなのだ。さらに変な、というか奇抜な呼び方をされると、彼の許容範囲を超えてしまふ。

?? 「う……………ん。まあ、それでもいいや！もう朝だよ、お父さん……………」

?? 「あ、そうなの……………」

?? ひとく気だるげに流は言った。

??

??「どうしたのお父さん？具合悪いの？」

??「いや、朝弱いだけ。今何時？」

??「六時だよ」

??「え、もう六時！？そろそろ準備しなきゃ！」

??紅から時間をつけられると、流はがばりと飛び起きて、ぱっ、ぱっ、と服を脱ぎ始めた。

??「きゃっ！お、お父さん！」

??「あ、ごめ」

??ん、と謝る前に、紅は部屋の外に移動していた。

??

??「……あーあ、やっちゃった……」

??いつものくせでいきなり服を脱いだのが間違이었다。着替えながら、流は思う。もう自分は一人暮らしではないのだ、女の子がいることに気をつかわなければいけない、と。

??そんな自覚が、流の中でかすかに生まれた。？

第十二話 相談相手！

とにかく流は紅に弁明するよりも、着替えて授業に間に合うことを優先した。

?? 朝食を抜くのは当たり前、時には髪を梳かすことさえしないこともある。

?? ちなみに今日は、身だしなみは整えてあるが、朝食は食べない。?? 間に合うことが最優先、とでもいうように流は部屋を飛び出し、

?? 「ごめん紅ちゃん！僕、学校があるから！」

?? それだけをいうと返事も聞かずに紅の視界から消えてしまった。?? 呆然とした表情で父親が消えた階段を見つめる紅。その姿はどこか悲壮感に満ちていた。

?? 「……お父さん。いつちゃった」

?? いつてきますも言ってくれなかった。いつてらっしゃいも言えなかった。それが紅にとってはとてつもなく寂しく、悲しいことのように思えた。

?? 「あら、紅ちゃん。どうしたのそんなところで固まって」

?? 「……お父さんが、ガッコウに行っちゃった」

?? 「なに寂しそうな顔してるのよ？あなたも行くのよ？」

?? とたんに紅の顔が明るくなる。

?? 「お父さんとおんなじとこ？」

?? 「あー……。違うけど、楽しいわよ？」

??「むー……。お父さんとおんなじとこがいいけど、無理は言っちゃダメだよね……」

??「ゴネるかと身構えた管理人さんだったが、予想に反して紅はすくになつとくした。」

??「ほらほら、行くと決まったらさっさと準備しましょ！下にあなたの入居祝いがおいてあるわ！」
??「うん！」

??「紅は元気よく返事して、階段を降りる管理人さんを追いかけたのだった。」

??

??「ところ変わって、大学。」

??「広くもなく、狭くもない。大きくなく、小さくなく。偏差値まで高くなく、低くなくの中間大学。大滝流はそこに通っていた。」

??「へえ、今日も早いんだね」

??「あ、友香さん」

??「朝六時半。始業時間は八時にも関わらず、彼女はこの時間に構内にいた。スレンダーで、ラフな格好をしている女性、大神友香。」

??「あはは、電車一本逃すと間に合わなくなるんですよ」

??「そうなの？私も。お互い大変だね」

??「ちなみに、実は二人とも嘘である。軒並荘はここからそう遠くない距離にあって、彼は歩いてきた。友香が住むマンションも、同

じようなものである。

?? 高校時代からの親友である二人は、互いが互いにとって大切な相談相手と言えた。

?? しかし、同じ大学だと喜びはしたものの学部が違い、会うことができないのではないかと二人は危惧した。そして、友香が言う。

?? 『あたし、実はすっごい田舎に住んでてさ、八時に間に合おうと思ったらメチャクチャ早く出なきゃいけないんだよね』

?? 懇願であり、助け舟であったその嘘に流は乗り、結局、明らかにされることなく現在まで続いている。

??

?? 「ねえ、友香」

?? 「ん〜？」

??

?? お茶を飲みながら、友香は訊く。

?? 「娘ができた」

?? 彼女は飲んでいたお茶を全て吐いた。気管に入ったのか、ゴホゴホと咳き込み、肩を震わせる。

?? 「だ、大丈夫!？」

?? そんなふうには友香を心配する流の声も、耳に入っていない。

?? 「な、あ、げほ、ごほ、ええ!？む、娘って、誰とシたの!? 責任とるんでしょうね!？」

?? 「とりたいんだけど……」

?? 「なに!？まさか、結婚はしないと不真面目なこと……」

?? 「いや、なんか、深紅の娘って、本人は言ってる……」

?? ピタリと、友香は動きを止めた。責任を取りたくてもとれないことに、気付いたからだ。

?? 「ごめん。……って、本人が言ってる?」

?? 「うん」

?? 「……何歳?」

?? 「二十歳」

?? 「あなたのじゃなくて!その子の!」

?? 「十歳」

?? 今度は別の意味で、友香は固まった。

?? 「いや、さすがにありえないでしょ」

?? 「なんで?」

?? 「なんでって、製造したのが十年前じゃないと話合わなくなるじゃん。まさかあなたでも十歳でそんなこと……」

?? しばらく、無言。

?? 「……マジ?心当たり、あるの?」

?? 「……」

?? 沈黙こそが、答えである。

?? 一歩、二歩と友香は流との距離を開けていく。

?? 「引かないでよ!」

?? 「引くに決まってるじゃん!え、なに?昔っからあんたら仲い

いと思つてたけど、十年前から恋仲！？つてか、いつ産んだのよ！
産めるわけないじゃない！深紅は小五のとき事故で大怪我して、長
い間、にゆう……いん……」

??友香は思い出す。大怪我した、というからお見舞いしようとし
たのに、病院すら教えてもらえなかったこと。担任が深紅のことを
話すとき、妙に顔が引きつっていたこと。翌年退院してきた深紅は
大怪我していたわりには妙に元気だったこと。

??「……あの一年で産んだのね」

??「多分」

??ちなみに、流はついさっき思い出した。

??「……それにしても、あなたがロリコンだったなんてね……」

??「僕はロリコンじゃない！」

??「はいはい。わかってるわよ。で、何か相談事？……って訊か
なくても言ってくれるわよね？というか言え。さあキリキリ吐け。
ながあつた。十年前に遡って吐け」

??友香は妙に圧力のある声で流に言った。

??逆らえるわけがなかった。??

第13話 登校しますー

一方、軒並荘では。

?? 紅がランドセルを背負ってぴよんぴよんと飛び跳ねていた。今にもはばたきそうな軽快さで、その表情は太陽のように明るい。

?? 「へえー、これがランドセル、かぁ……………」

?? 背中にあるピカピカの赤ランドセルに目をやりながら、紅は嬉しそつに言った。

?? 「ふふふ、よかったわね。お勉強がんばるのよ?」

?? 「うん!」

??

?? 朗らかに紅は返事をする。

?? 「じゃあ、一緒に行きましょうか。道を覚えるまでは一緒にいつてあげるから、心配しなくていいのよ?」

?? 「大丈夫だよ、管理人さん!」

?? 今にも飛び出しそうな勢いで走り回りながら、紅は返事をする。

?? 「そろそろ時間だから、行きましょうか」

?? 「うん!」

?? 時刻は七時半。早すぎず遅すぎずの、ちょうどいい時間だった。

?? 「……………つたく。管理人さんとの時間邪魔しやがって……………」

?? 椅子に座って紅を見物していた圭吾が忌々しそつに言った。

?? 「う、ごめんなさい……」

??

?? 少しだけ、紅の表情が曇った。

?? 「あーっ、もう！いちいち気にすんな！」

?? 圭吾は取り繕うように叫んだ。事実、彼は紅を疎ましくは思っていないのだ。さっきだつて無邪気にはしゃぐ紅が微笑ましくて、ずつと眺めてしまっていた。つまり、さっきのは彼の照れ隠しだったのだ。

?? 「う、うん。じゃ、行ってきます、圭吾お兄ちゃん！」

?? 「お、おう……」

?? お兄ちゃん、と呼ばれたことに驚いて、圭吾は軽く動揺してしまつ。紅はもう振り返らず、管理人さんと一緒に、小学校へと向かった。

?? 「紅ちゃん！でつきたよぉー！」

?? 赤く充血させた目をバカみたいに綻ばせて、好助がロビーに降りてきた。

??

?? 「……あれ？」

?? 好助は紅の姿を見つけることができず、呆然と言った。

?? 「こ、紅ちゃんは？僕の天使は一体どこに！？も、もしかして

さらわれちゃったり」

??「紅は学校だロリコン野郎！」

??「圭吾が怒りをあらわに叫ぶ。昨日までは好助は女性に優しく紳士的で、尊敬できた。その紳士ぶりといえは、幼い子供が好きだと公言しているのも、何かの冗談だと全住人に思わせるほどだった。だから、その言が真実だと知って、圭吾はがっかりしていたのだ。」

??「そ、そんな！？せ、せつかく夜も寝ないで作ったのに！」

??

??「好助が作ったという作品を見て、圭吾は一言。」

??「……………死ねば？」

??「いきなり死ねとは酷いな!？」

??「いや、マジで死んでくれ。紅の教育に悪いだろ」

??「好助の手にしつかりと握られているのは、メイド服だった。しかも、機能性を無視したフリルがたくさんついていて、カチューシヤにはどういうわけかネコミミがついている。」

??「なぜだ！なぜ僕が紅の教育に悪いのだ！？約束だったろう、ここのお手伝いをする！お手伝いといえはメイドさん！メイド服を着てこそ、紅ちゃんは約束を果たせるのだっ！」

??「いや、マジできめえから死ねよてめえ！何真剣に語ってんだよ！」

??「気持悪い？ふふふ、なぜそう思う？」

??「不敵な笑みを好助は浮かべる。」

??「決まってるだろ！ガキにメイド服なんて」

?? 「僕は紅ちゃんにメイド服をさせようとしているのだ。子供に、ではない」

?? 「その違いはあんのかよ!？」

?? 「あるとも」

?? 妙に自信に満ちた声で、好助は断言した。

?

?? 「あるとも。君は女性にメイド服を着せたいとは思わないだろう。しかし、管理人さんになら、メイド服を着せたいと思うのではないか？」

?? う、と凶星をつかれてたじろぐ圭吾。一瞬、メイド姿で軒並荘の玄関先を掃除している管理人さんを想像する。……その姿は、あまりにも似合っていた。

?? 「いいかい、僕は、紅ちゃんが子供だから好きなんじゃない、紅ちゃんが紅ちゃんだから、僕は好きなんだ。だから、メイド服を着せたいと思うのは自然の理だ!」

?? もう朝っぱらから子どもに真剣に告白するとかダメ人間まっしぐらだが、だからこそその迫力が彼にはあった。

?? そう、好きな人に注ぐ熱意。それだけは素直に評価できた。

?? 「つて、騙されねえぞ。てめえが紅のこと好きなのとメイド服とどう関係あんだよ!？」

?? 「紅ちゃんがきたら可愛いかも、その思いこそが全ての原動力! お着替えも手伝いして、それから」

?? 「もう黙れてめえ! 通報すんぞ!」

?? 「ごめんなさい調子乗ってました」

??一瞬で好助は手のひらを返して平謝り。タイプの人間が人間なだけに、警察は苦手なのだろうか。

??「……つたく。俺は冗談だけだな、紅はマジでやるぞ。ちなみに、俺ら軒並荘の住人は紅の通報を止める気はない」

??「なんで!？」

??「当たり前だろロリコン野郎が!」

?

??こいつ、紅を無理矢理手籠めにしかねないからな。脅しかげとかなきゃふあんだぜ。

??圭吾は好助のことをまるで信用していなかった。昨日までは尊敬の眼差しで見っていたのに、である。悪人の善意と善人の悪意は目立ちやすい、ということだろう。

??「……やれやれだよ。」

??圭吾は心中で肩をすくめた。?

第十四話　転校しました！

?? 圭吾が好助に脅しをかけている最中。所は流の通う大学構内のカフェテリア。

?? 窓際の一番いい席に二人の男女がいた。男の方は大滝流で、女の方は大神友香である。

?? 「……ふうん、なるほど、ね。突然娘と名乗る人間が押しかけてきた、と」

??

?? 友香はコーヒーマドラーをかき回しながら、冷徹ともとれるほど低い声色でそう言った。

?? 彼女が見下すその先には、罪悪感で縮こまった流がいた。彼の前には水の入ったコップがおかれていた。

?? 「で、あんたはその子の目尻とか青囲気とか深紅に似てるから、信じたわけだ」

?? 「……まさか、紅が僕の娘じゃない、と？　昨日それで大変なことになったんだよ？」

?? 「なにが起こったのよ」

?? 「絶望して路上で生活していくとかなんとか」

?? かなりはしょっているが、昨日の紅のパニックを端的に表せばそうなるだろう。

?? 「……そーぜつねその子。普通泣き落としとかなんなりあるけど……速攻で諦めるかふつつ？　というか生活費とかどうするつもりだったのよその子？　お金持ってないんでしょ？」

??「うん、体一つで来たって言った。……生活費に関しては、なんか身体売るとかなんとか……」
??「……………壮絶ね」

??そんな言葉で済ませていいのだろうかは甚だ疑問だが……。

??「ホントだよ」

??「というか、その子どんな教育受けてきたのよ。身体売るなんて子供の発想じゃないわよ」

??たしかに、と流は相槌を打った。

??「深紅、昔っから変な……というか妙にしつかりした子だったら、娘にそういうことを教えることに抵抗ないのかも」

??「だね」

??「それが」

??「なに？」

??「……………それが、自分で調べたか」

??なおさらありえない、と流は独りごちた。

??「……………まあ、ただの予想だけどね。ともかく、流」

??「なに？」

??コクンと友香はコーヒーを飲み干し、そして、真剣な表情で、彼に言う。

??「その子の経緯がどうであれ、要注意よ。きつと、何かあるわ」
??「それは、確定？」

??「ええ。まず間違いなく、その子……紅ちゃんだったけ？ まあ、

とにかく、その子はまともな人生歩んじやいないでしょうね。全く、深紅ったら何してんのかしら」

??? ブツブツと苛立ちまぎれにつぶやく友香をよそに、流は思う。

??? とんでもない子が来たな……。

??? そんな、どこか他人事めいた感じで。

??? さらに場所は変わって、市立中央小学校。

???

??? 五年三組の教室、その教壇の隣に、軒並荘の新しい住人、成瀬紅が立っていた。

??? 「こんにちは、成瀬紅です！ みなさん、よろしくおねがいします！」

??? 子供独特のイントネーションで、紅は自分のクラスメイトに自己紹介をする。

??? 「はい、ありがとうございます！ みんな、何か聞きたいことはあるかな？」

??? 教壇の女性教師、つまり紅の担任が、笑顔を振りまきながら言う。

??? 「紅って呼んでください」

??? 「え？」

?? 「あの、成瀬はダメです。大滝になるかもしれないから。紅って呼んでください」

?? 聞き返したのは、名前の呼び方ではなく、敬語を使うという一点に限った。この年の子供はまだ敬語とそうでない言葉の区別をつけずに話す。ありがとございます、ぐらいは言うが、紅のようにきちんとした敬語を使えるというのは異様といえた。

?? 「はい！」

?? 慣れぬ人格に担任が戸惑っていると、助け舟のように生徒の一人が手をあげた。

?? 「私の名前は風見 水鳥。かざみみどり、だからみんなはミドリか、カザミドリって呼んでる！ あなたもそう呼んで！ あなた、どこに住んでるの？」

?? 水鳥は快活に笑い、簡単な自己紹介と、質問を終えた。

?? 「私、軒並荘ってところに住んでるの！ 今度一緒にあそぼ？」

?? 「うん！」

?? 紅はさっそく、友達ができたと思った。？

第十五話 学校と圭吾の自室！

?? そして、他にもいくつか簡単な質問を受け答えしているうちに、休み時間になった。朝の一時時間をまるまる自己紹介と質問タイムで潰したのだ。本来ならいけないことかもしれないが、担任の紀陽きようは、別にそれでもいいか、とも思っていた。

?? 「ココロせんせ！」

?? 「なあに？」

?? 教卓にいた彼女に、女生徒、陽木 昇子が軽やかに声をかけた。

?? 「ねえねえ、紅ってね、どこから来たの？」

?? 「ええつと、遠いところよ」

?? 「それって、がいこく？」

?? 「ええ、そうだって聞いているわ」

?? 「ふうん……」

?? 「どうかした？」

?? 「ううん、なんでもなし！」

?? そう言っつて、その昇子は友達のもとへと駆けていった。

?? ふう、と志は肩を落とす。彼女が遠いところ、と形容したのは、隠し事とかそういうわけではけしてなく、志とて紅がこの学校に来る前にどこにいたのかは知らされていないのだ。

?? 不思議なことだ、とは思ったけれど、それ故に詮索をしたりしようとは、別段思わなかった。志は子供だからといって無遠慮に踏み込んでいいとは思っていない。そして、彼女はそれを美德と感じていたが、本当に生徒が大変な時に気づけない、という欠点もはら

んでいることも、承知していた。

?? 「先生」

?? 「……あ、紅ちゃん、どうしたの？」

?? 「私、学校のこと、よく知らないんですが、質問してもいいですか？」

?? 「え、ええ、どうぞ」

?? ばか丁寧、と言えるだろう。紅は敬意を払っているつもりかもしれないが、あまりにも他の子どもと違うので、志は戸惑うばかりだった。

?? 「休み時間に、何をすればいいのですか？」

?? 「はい？」

?? 志はずっこけそうになった。あんまりにもあんまりな質問で、一瞬ふざけているのかと思ったのだ。

?? しかし、紅の目を見て、それがおふざけや冗談のつもりは全くないことに気付く、と同時に、さっきの前おきの真意も、悟る。

?? この子、学校というものを、全く知らない？

?? 核心とも思える疑問に、志は意外と確信をもてた。

?? 「紅ちゃん、やすみ時間はね、好きに遊んでいいのよ。でも、ルールは守ってね？」

?? 「……学校は、勉強するところだと思ってました」

?? 「もちろん勉強もするわよ？ でも、勉強以外にも、学校では学ぶのよ」

?? 「……勉強以外、ですか？」

?? 「ええ。たとえば、友達の作り方とか、遊び方とか、ね？」
?? 「……ありがとうございました」

?? 少しでも疑念の晴れた顔をして、紅は昇子、水鳥のいるグルー
プの輪に入っていた。

?? 「コーはココロせんせ何話してたの？」

?? 「なんでもないよ。ちよつと学校について聞いてただけだよ」
?? 「へえ。なに訊いたの？」

?? 「ん？ 休み時間になにしたらいいのか、って」

?? 「そんなの好きにすればいいじゃん！ コーは心配性ね」

?? 「そ、そう？」

?? 「そうだよ！ 気にせず遊びばいいんだ！ ねえ、次の休み時
間は外に出てもいいんだ、だから行こう！」

?? 「うん、ミドリちゃん！」

?? 「おう！」

?? そんな会話を盗み聞きしながら、志はある決意を胸に灯す。

?? 「……少し、訊かなきゃ。」

?? できるだけ、早く。詮索をしないと、言っている場合ではな
い。

?? 急がなきゃ。

?? そう彼女が思うと同時に、二時間のチャイムがなった。

??

?? 紅の担任紀陽 志が決意新たにしている最中、軒並荘の一室。

?? 「ふんふんふん……」

?? その部屋は、異常だった。パソコン、パソコン、パソコン。たくさんパソコンが狭い部屋にひしめき合い、人が生活できるスペースの大半を占領していた。その部屋の主、大星圭吾はただでさえ小さい部屋の、唯一空いたスペース……椅子に座ってパソコンに向かっていた。

?? 「あ、あの……圭吾君は、何を、しているんですか……」

?? その後ろには、召使いのように小河 蛭が立っていた。この部屋の狭さははつきりいって戦闘機のコクピット並なのだが、蛭が驚いている様子はない。

?? 「あのさ、なんでいるわけ？ 俺さ、出て行って言わなかった？」

?? ふり返ることなく、彼は蛭に冷たく訊く。

?? 「あ、あの、でも、その」

?? 「だから、いちいちどもんなんていってんだろ。ほら、ゆっくりでいいから、理由を言え」

?? 「あ、あの、私、その、圭吾くんが、その、喉渴いてないかな、つて……」

?? 「お前は俺の召使いか。放つとけよ」

?? 振り返らない圭吾はわからないだろうが、蛭の手にはお盆があり、その上にはコップに入った水が乗せられていた。

?? 「……ち、違う、けど」

??「だったら、いちいち給仕なんてしてくれなくていいんだよ。ほら、とっとと出てけ」

??「……はい……」

??それでも引つ込みがつかなかったのか、彼女は近くの棚にコップを置いた。そして、音を出さないように少しずつ扉を開けて出ていった。

??すると、部屋の中は圭吾だけになる。

??「……この部屋、監視カメラあんだよ」

??後ろを振り返り、彼は置かれたコップをとった。

??「……ありがとな」

??誰にともなく、彼は呟いた。

??「……やっぱり、そうか」

??コップの水を大切そうに飲みながら、彼は一人つぶやく。

??「成瀬 深紅……か。また、流もえらく大変なヤツとガキ作つたもんだ」

??彼が見つめる画面の上には、写真と、プロフィールが映っていた。写真には紅が、いや紅ソックリの顔をした女性が映っていて、プロフィールには、たくさんの個人情報がかかれていた。その中で、一際目立つ項目が、一つ。

??「……ったく。シャレになんねえつての」

??その項目を睨みつけながら、彼は苦々しく吐き捨てた。
??

第十六話 相談だらけー

?? 圭吾が深紅のことを調べている時と同じ頃、管理人室では。

?? 「……その、管理人さん」

?? 「どうだった？ うまくいった？」

?? 管理人さんと小河 蛭がお茶会を開いていた。といつても和服を着て、抹茶を入れる方のお茶会ではなく、紅茶とお菓子を持ち寄って食べるフランクなものだ。

?? 「……その、出ていけと言われました」

?? 「あらあら。パソコン中だったからかしら？」

?? 「……よく、わかりません」

?? 小河 蛭が先ほど圭吾の給仕をやっていたのは管理人さんの指示だったりする。なぜ管理人さんがそんな指示をしたかという点。

?? 「ううん。二人とも気難しいからね。無理もないわね」

?? 「……気難しい、ですか」

?? 「そうよ。ま、相談してくれたのはうれしいけど……」

?? 蛭が相談を持ちかけたからに他ならない。

?? 「……やはり、迷惑だったでしょうか」

?? 「そういうわけじゃないのよ。でも、今は時期が時期だから……」

?? 「……時期、ですか」

「そう。……新しい子が、入ってきたでしょ？」

「……ええ」

?? 圭吾には常にともるなと怒鳴られる蛍だったが、管理人さんと一緒にいるときは普通に話せるようだった。言葉の端々から見て取れる意思の弱さは変わらないが。

?? 「ええ。あの子、いろいろと変でしょ?」

?? 「……まあ」

?? 自分が言えることではないとは思っているが、一応同意しておく。

?? 「どうも成熟しすぎてるっていうか……。いろいろおかしいところがあるのよね」

?? 「……それは、そうですが」

?? 「だからといって、ここを追い出すとか、そういうのは考えてないから、安心してね?」

?? 「……はい」

?? 安心したように蛍は答えた。軒並荘は紅のようにワケありの間が集うところなのだ。

?? 大滝流はその貧さを紛らわすため軒並荘に入居してきたように、好助にも大月夜にも圭吾にも蛍にも、それぞれの事情があった。

?? 紅を追い出す、ということは彼らも追い出す可能性があるということにほかならない。

?? 「……でも、見たかぎりおかしいところは、ありませんが」

?? 「外見はね。でも、中身はわかんないわ。もしかしたらとんでもないバケモノを心の中に飼ってるのかもしれない」

?? 「それは、誰でも同じだと思います」

?? 誰の中身も、わからないもの。蛭はそう考えていたし、管理人さんも否定しなかった。

?? 「そうね。でも、子供に、そう感じることに、あるかしら？」

?? 「……ありませんが」

?? 「そうよね！ だから」

?? 「だから彼女はおかしい。そう考えるのは、まちがっています」

?? 普通と違うから、自分の感覚と違うからと言って、彼女の人格を否定してはならないし、否定されたくない。管理人さんに、そんな風に考えて欲しくない。そんな思いがあったから、蛭は珍しく、自分の意思を強く主張した。蛭のそんな意思を感じ取ったわけではないだろうが……。

?? 「……そう、ね。私、ちょっと焦ってたかも」

?? それでも、結果的には彼女の思いは管理人さんに届いた。

?? 「……焦りは禁物、ですよ」

?? 「そうね。じゃあ、これからだけど……」

?? 「……はい」

?? 蛭と管理人さんは、楽しそうに話を続ける。

?? かすかな違和感を、ここにいない紅に感じながら。

?? 小河蛭と管理人さんとの歓談とほぼ同時、大学構内、カフェテリア。

?? そこには朝と同じように二人の男女が向かい合わせに座っていた。

???「深紅のこと、覚えてる?」

???男、大滝流が神妙に訊く。

???「忘れるワケないじゃん、あんな強烈な印象の奴」

???女、大神友香がやはり朝と同じようにコーヒーを飲みながら答える。

???「昼休みに呼び出しといて、要件はそれ? 紅って子の相談にならぬってあげなくもないけど……」

???それでも、やはり友香は乗り気でなかった。深紅のことも、紅のことも、相談されてもわからない、というのが彼女の本音だからだ。

???「違うんだ。どういうわけか僕、深紅のこと、すっかり忘れちゃってるんだ」

???友香は目を丸くした。

???「……はあ? 冗談でしょ? あんたら高校三年間ずっと、盛つてたじゃない」

???「さ、盛ってた?」

???友香は可笑しそうに頷いた。

???「所構わずいちゃいちゃいちゃいちゃ……発情期のウサギかと思っくらい」

?? 「なっ……………」

?? 「嘘よ。覚えてないって本当なのね」

?? 鎌かけでよかったと、流は本気で思った。

?? 「でも、周囲がうらやむカップルだった、っていうのは本当よ。まさか忘れるなんてね」

?? 「僕だって、忘れたくはなかったんだけど……………」

「……………まあ、それだけシヨックだったんでしょ。深紅が留学しちゃったの」

?? 「……………はい？」

?? 留学？ 彼は心の中でその単語を反芻した。

?? 「はあ？ まさかあんたそれすらも忘れたの？」

?? 流は頷いた。

?? 「……………しょうがないわね。あんた、ほんとに深紅の彼氏？」

?? 「……………さあ」

?? 友香は呆れ返ったように肩を落とした。

?? 「薄情者ね、あなた」

?? 「……………そうなのかなあ……………」

?? 「自分のことでしょうか……………」

?? 友香は呆れたようなため息をついた。

?? ?

第十七話 お料理！

?? 「……こんなに恥ずかしい目に遭わされたのは初めてっ！ なんでこんな服しかないの!？」

?? 紅はメイド服に身を包み、顔を真っ赤にして怒鳴る。

?? 「嫌なら着なきゃいいのに」

?? 「おとーさん！ 私、おとーさんが家賃払ってないから、こんな恥ずかしい格好して台所に立たなきゃいけないんだからね?」
?? 「う……」

?? ぐうの音もでない流であった。

?? 「いや、そもそもお前にメイド服着ろって言うてんの好助だけだし。本気で嫌なら着なくていいんだぞ? もしそいつが怖い、つてんなら、ちゃんと俺らがそいつシメてやるからよ」

?? お願いしようかな、と一瞬言いかけた紅は、圭吾の本気の瞳を見て、思い直した。その意思の強さは、好助を殺しかねないほどだったからだ。

?? 「い、いいよ。これ、可愛いから気に入ってるし」

?? ここで自分が折れるあたり、紅はお人好しである。

?? 「無理しなくてもいいのよ?」

?? 「う……。で、でも、これ以外にエプロンないんだし……」
??

?? 苦々しく紅は言った。こんな服着たくない。着たくないけど、着るしかない。そんな心の内の葛藤がありありとみて取れる表情だった。

?? 「……と、とにかくっ！ ? 早くお料理してこれ脱ぐからっ！」

?? 恐るべき速度で、彼女は共用リビングの奥にあるキッチンへと消えていった。

?? 「……まったく、そんなに急がなくても……」

?? 管理人さんも、紅を追いかけてキッチンへと入った。残された男衆。

?? 「……で、なんで好助さんはあんなに紅に手を出そうとするんですか？」

?? 「なぜ? ?それは彼女が私の前に現れた唯一の天使だからだ！」

?? 「……てめえ、×てやろうか？」

?? 「ふはは、やれるものならなってみろ！」

?? 紅がいた時のテンションを好助はまだ引きずっていた。

?? 「おう、言ったな」

?? 結果的に、そのせいで彼は軽はずみな発言をしてしまい、

?? 「あ、まって、今のなし」

?? 「もう遅い。死ねロリコン」

?? 「ギゃ〜ッ!？」

??最終的に、好助を死に至らしめた。いや、死んではないが、半分死んでいるようなものだ。

?

??「……あゝあ、やつちやつた……」

??しまった、というふうには言ったが、その顔は微妙に晴れやかだった。

??「はっ！　?口ほどにもねえ！」

??一昔前の不良よろしく、彼は好助の死体モドキに吐き捨てた。

??「……管理人さん、今叫び声聞こえなかった?　?それも、力

エルを踏み潰したような悲痛なやつ」

??「聞こえなかったわよ?　?幻聴じゃない?」

??「そっか」

??ここはキッチン。ただのアパートの物とは思えないほど大きく、本格的な物がいくつも立ち並んでいた。シンクやコンロ、冷蔵庫や鍋に至るまで全てが業務用で、ここがレストランのキッチンだと言われても、素人目にはわからないだろう。そんな豪華なところで料理をしているのにも関わらず、紅は特に驚いている様子はない。まるでここが日本の標準だと思っっているかのようにだった。というのも、

紅にしてみれば、日本のキッチンなど、今まで見たことがなかったのだ。彼女は驚いたが、それを隠して、自然にふるまうよう努めていたのだ。けれどそれは、自然な反応のはずなのに、不自然だった。?? そんな紅に管理人さんは不思議に思いながらも、思考は先ほど聞こえた悲鳴のことに集中していた。紅には幻聴と言ったが、彼女はしつかりと聞こえていた。おそらく、好助のものであろう断末魔だ。

?? 「……管理人さん？」

?? 「え、ええ。何かしら？」

?? 彼女ははつとなる。少し考えすぎた。管理人さんはあわてて手を動かし、料理を続ける。

?? 「ねえ、私、本当にここにいる、いーのかな？」

?? 「……どうしてそう思うの？」

?? 「だって、私ほとんど居候だよ？　ここは人に部屋を貸して、それでお金を貰ってるところなんでしょ？　アパート、っていうところ」

?? 「それはそうだけど……」

?? 管理人さんは反応に困る。ここで何を言うかによって、紅がこの先安心していけるかがかかっているような気がしてならなかったのだ。

?? 「……私、建前みたいにこうしてお料理してるけど、こんな働いていることにもならないよ。……もし、管理人さんがこの経営に困ったら……間違いなく、私のことを怨むと思う。私、そんな風に思われたくないから……」

?? 「そんなことないわ」

?? 管理人さんは自信を持って答えた。たとえ経営が苦しくなっても、紅を追い出すということはしないだろう。もし追い出すなら、るくにバイトもせずに家賃を滞納し続ける流なのだが……。それはこの子の前では冗談であつても言えない。流が追い出されるなら自分も、と思うはずである。

?? 「私は誰も追い出したりしないわ。バイトやって、とか命令することはあつても、ね」

?? 「……か、身体を売れ、とかは？」

?? 管理人さんは呆れたように肩を落とした。

?? 「あのね。あなたはどつからそんなこと教えてもらったの？」

?? 「おかーさんが、本当に困った時は、つて言つて……」

?? なんて母親だ、と彼女は憤慨する。いくらなんでもこんな子供に、いや、娘にそんなこと教えるなんてどうかしている。しかし、それをこの子に言つていいものか。どうにも彼女は紅の扱いを迷っていた。

?? 「ああ、もう。あなたは子供なんだから、そんなこと考えなくてもいいのよ」

?? 「……おかーさんとおんなじこと言ってる」

?? 「そう？　嬉しいわ」

?? 一応、紅の母親もらしいところがあるんだ、と安堵する。

?? 「……じゃ、続きしましょうか。みんなお腹すかしてまってるわ」

??」「うん!」

?? 仲良く、二人は料理を続けいく。
??

第十八話 晩御飯の準備！

???コトコト、コトコトお鍋が鳴る。紅は吹きこぼれないように、慌てて火を弱める。鍋が鳴らなくなったことを確かめて、ふう、と安堵する。その一連の動きを、すぐそばでハラハラしながら見守っていた管理人さんが胸を撫で下ろした。

???

??「大丈夫、紅ちゃん」

??「だ、大丈夫だもん！」

??「紅が意地を張って叫ぶところもまた可愛らしい、と管理人さんは思う。」

???

??「管理人さん、おとーさん達今何してるの？」

??「何してるんだらうね」

??「優しく言いながら、管理人さんはリビングを覗く。」

??「オラっ！ ? 死にやがれロリコン！ ? 紅になんてこと教え込む気だ！？ ? 犯罪どうこう以前にてめえはもう人じゃねえ！

? ケダモノだ！ ? 死ねっ！」

??「ひ、酷いじゃないか圭吾君！ ただ、僕は少しだけ紅ちゃんに可愛いメイドさんとしての心構えその他をだね」

??「その他の中になんて『戦うメイドさん』なんて項目があるんだよ！？ ? 紅が信じちまったらどう責任とるんだよ！？？」

??「男の責任の取り方は古来よりひとつ、結こ」

??「まあまあ、圭吾君も、童野先輩も落ち着いてください」

??「ヒートアップしていた二人を、流がなだめた。」

?? お？ ?もしかして流君は怒ってないのかな？ ?大人だな。
?? 覗いていた管理人さんはそう思った。が。

?? 「おお！ ?やはり君は僕と娘さんの交際を認めてくれるんですね！？」

?? 「…………。そういえば、責任とってくださるそうで」

?? 「そうだとも、男とは責任をとってこそ一人前！ ?だから」

?? 「わかりました。少し、待ってください」

?? 流は好助の言葉を途中で遮ると、管理人さんのいるキッチンに向かってくる。

?? 「お、紅ちゃんを連れてきてくれるのかい？」

?? 「あの、管理人さん、ちょっと、あれ貸してくれませんか？」

?? 流が指し示した物を見て、管理人さんは愕然とした。むちゃくちゃ怒ってるじゃない。

?? 「え、ええつと、それはさすがに…………」

?? 「持っていきます」

?? 「あ、流君！？」

?? 渋る管理人さんを見無視し、流はあるものをリビングに持って行った。

?? 「おお！ ?お父様、やっと、念願が、かなつ……………って、え？」

?? 流は持ってきたものを、好助の前に投げ置いた。

?? 「責任とってください」

??「……ええつと、その、冗談だよ、ね？」
??「責任とつてくれるんでしょう？」

??好助の前には、包丁が一本。

??「こ、これは、一体なにをしるとう意味なの、かな？」

??「男は責任とつてこそ一人前。そう言ったのはあなたです。しかし、どうも童野先輩は責任の取り方を知らないようですので、特別に教えてさしあげます。これは、古来より武士が責任をとる方法で、切腹と言います。外国にも、『ハラキリ』という風に伝わります」

??しかも流はマジ切れだったりする。好助は冷や汗を垂らした。

??「あ、その。生意気言つてすみませんでした」

??「……そうですか。わかってくれたらいいんです。童野先輩、もう紅に変なこと教え込もうとしないでくださいね？」

??好助が謝ると、流はすぐに怒りを引っ込めた。

??「……約束はできない」

??「ハラキリ、します？」

??「断言します、もう二度と紅には変なこと教えません」

??好助は深く頭を下げた。

??「お、脅かすな流！」

??「え？」

??今まで事の成り行きを見守っていた圭吾が涙目で叫んだ。

??「て、てめえなにやってんだよ!? ?お、俺ホントに刃傷沙汰になるかと思っただじゃねえか! ?頼むからもうやめるよな!」
??「あ……。ごめん、圭吾君」

??今度は流が頭を下げた。見守っていた管理人さんも、よかったよかったと胸を撫で下ろした。

??「管理人さん? ?おとーさんたち、仲良くしてる?」

??「え、ええ。とつても仲良しよ」

??「よかった!」

??料理をしながら無邪気に微笑む紅に、これ以上変なことを覚えさせてはいけない、と管理人さんは母親のような義務感を持った。

??「ふんふん」

??「ご機嫌ね、紅ちゃん」

??「うん! ?だって、みんな仲良くしてるもん!」

??「そ、そうね……」

??絶対にさっきの騒ぎを紅に見せる訳にはいかない、と彼女は強く思ったのだった。

「い、今どれくらいかな、紅ちゃん?」

「あと少しで出来るよ!」

話題を変えるように質問して、紅はすぐに答えた。今日の献立はおみそ汁と焼き魚、それと何品かのサラダである。

「そっか! ?じゃあ、そろそろみんな呼んでくるね!」

「あ、うん！ よろしくね、管理人さん！」

火も消えたし、もう目を離しても大丈夫だろう。そう思った管理人さんは、部屋にこもっている蛍と夜を呼びに行った。

「……………」

紅は鼻歌を歌う。鈴のような声で歌っているのは『マザーグース』であるのがなんとも言えず恐ろしい。

「my mother has killed me. my
father is eating me. my brother
and sisters sit under the table
」

紅は歌いながら、棚に入っていたお椀を取り出し、おみそ汁をついでいく。

「picking up my bones, and the
y
」

「紅ちゃん？」

「あ、管理人さん」

そこへ、二人を呼び終えた管理人さんがやってきた。ちなみに流や圭吾たちに喧嘩をしないように言い含めてからここに顔を出したので、今リビングではうわべだけの平和な空間が広がっているはずである。

「何歌ってたの？」

「お母さんがよく歌ってた歌。……………」
「あんまりいい歌じゃないけ

ど、私みたいだから』って」

「へえ〜。なんていう歌なの？」

「知らない」

そう言つと、管理人さんにおみそ汁の入ったお椀を渡す。

「はい、これ」

「ありがとう、紅ちゃん」

二人は仲良く、晩御飯の準備を進めていく。

「……my mother has killed me .
my brother
and……」

紅のかわいらしい歌声と共に。

第十九話 経歴の片鱗！

「できたよー！　？お待たせ！」

？？料理が完成し、紅が元気にお膳を運んでくる。

？？「ありがとうございます紅ちゃん様」

？？「……どうかしたの、好助さん」

？？いきなり丁寧になった好助に紅は驚いた。

？？「い、いや、なんでもない。なんでもないよ、紅ちゃん」

？？「……ふーん。ま、いいけど。ご飯、作ったから食べてね」

？？ガチャン！

？？割と乱雑に紅は好助のお膳を置いた。少し態度が変わった程度で紅の不信は変わらないようだ。

？？「はい、おとーさん」

？？

？？対照的に丁寧に、流のお膳をおく。

？？「あ、ありがとう、紅」

？？「……うん」

？？なにが恥ずかしいのか、頬を赤らめて紅は頷く。

？？「初々しいね、全く。紅もいちいち恥ずかしがんな。これから

ずっと一緒に暮らすんだぞ」

??「え、あ……う、うん。ありがとう、圭吾お兄ちゃん」
??「おう」

??内心の照れを隠しながら、圭吾はそっけなく言う。
??

??「……う、こんにちは……」

??上の階からおずおずと小河　？蛍が降りて来た。

??「あ、蛍お姉ちゃん！　？座って座って！」

??「……あ、ありがとう」

??「ガキ相手にどもってんじゃねえよ、ったく……」

??不快感を露わにして、圭吾が言う。

??「……う、うん」

??「ふん、わかりやいいんだ」

??ぶつきらぼつに圭吾は言った。

??「こらこら、圭吾君。そう女の子をいじめてはいけないよ」

??「……大月さん」

??蛍のあとに続いて、大月　？夜が降りてくる。

??「あ、夜おじ……お兄さん」

??「ふふふ、おじちゃんがかまわないよ。もうお兄さんなんて歳でもないしね」

??「う、うん、夜おじちゃん」

?? 蛩と夜が席に座ると、紅は二人の前に膳を置く。これで、全員の食事が揃った。管理人さんが席に座り、周りを見回した。

?? 「みんなそろったわね？　それじゃ、いただきますー！」
?? 「いただきます！」

?? 管理人さんの号令で、みんなが手を合わせる。流也好助、圭吾たち若い男性陣がかきこむように食べ始めた。女性陣は対照的にゆっくりと食事を始める。

?? 「ぱく、ぱく……うん、美味しいよ、紅」

?? 「ありがとう、お父さん」

?? 「うん！　？紅ちゃんが作っただけあっておいしい！　？できれば君も一緒に」

?? 「黙って食べられませんか、好助さん？」

?? ?

?? すかさず流の牽制が入るあたり、もう彼は慣れたのだろう。

?? 「……つたく、二人ともこんなにうまい飯食ってるのにやかましく喚くなよ」

?? 圭吾は比較的落ち着きながら舌鼓を打っている。

?? 「……ねえ、管理人さん。おいしい？」

?? 「ええ、おいしいわ」

?? 「……と、とつても、素敵なお味です……」

?? ?

?? 女性たちは食べることに集中しているので、
全然食が進まない。

??「私、こういうところでご飯作るのって初めてで……うまくできたかわかんないけど、どう?」
??

??紅は不安げな表情で周りにたずねる。

??「初めてにしてはうまくできてるよ。……君は、料理そのものは初めてではないのかい?」

??真つ先に夜が答え、そして質問した。悪意は見受けられないが、それでもなんらかの意図を感じさせる口ぶりだった。

??「え? あ、う、うん。お料理はおかーさんと一緒に何度かしたことあるけど……」

??「どこで、どんな料理を?」

??「……えっと、砂漠の近くにあった街で、缶詰のお料理」

??「どんな缶詰?」

??夜が砂漠の街や缶詰料理などに何も言わなかったことに、紅を除く一同は少し疑問に思った。

??「えっと、たしか……ウサギの缶詰、っておかーさんは言った」

??「どうしてそんなところでそんな料理を?」

??次第に、彼らは気付く。夜がしているのは質問ではあるが、あまりいい意味での質問ではないと。

??「……うーん。なんだったかなあ。確か、悪い人がやってきたから、倒さなきゃいけないっておかーさんは言ってたよ……?」

??「……そうか」

??夜は思った通りだ、というような顔をしたが、他の人間はそうではない。遠い砂漠の街、缶詰料理、そして、悪い人を『倒す』。それらはひとつひとつは違和感を感じる程度しか意味はないのだが、それらが一同に集まると、一つの意味を醸し出す。
??すなわち……。

??「戦争でもやってたのか、紅？」

??皆が思慮して避けていた単語を圭吾はいとも容易く口にした。
??

??「せんそー? ……そんなのやってないよ」
??

??紅の一言に、皆は胸をなでおろす。

??「おかーさんは、『ふんそー』って言ってたよ？」

??彼らの撫で下ろした胸が凍りついた。

??「こ、紅ちゃん、い、今、紛争って言った？」

??管理人さんの質問は、紅を除く全員の疑問を表していた。

??「うん」

??「そんな……」

??管理人さんは否定がほしくて質問をした。しかし、彼女の願いはあっさりと裏切った。

??「…………? ?どうしたの、管理人さん。私、何か言っちゃいけないこと、言った?」

??「ううん、違うの、違うのよ…………」

??管理人さんは首を振りながら考える。

??紅が紛争地域にいたのなら、どう扱うべきか。

??彼女は紛争地帯にいた女の子の扱い方など知らないし、ここにいる誰も知らないだろう。

??「変ではないよ、紅ちゃん」

??何か言わなければと悩んでいた管理人さんを助け船を出すように、夜が紅に話しかけた。

??「変ではないが…………あまり言うべきではないだろうね」

??「どうして?」

??

??そう聞かれると、彼は管理人を指さした。

??「たしかに変ではないしおかしいわけでもない。けれど君がそういうことをいうと、優しい人間は困ってしまうんだよ」

??「…………悪いこと、言ったの?」

??「まさか。君が紛争を経験しているということは何も悪くはない。悪くはないが、人に気を遣わせてしまうのだよ。…………わかるね?」

??「…………うん。私、管理人さんに気を遣わせちゃった、ってことだよ」

?? 申し訳なさそうに紅は頂垂れた。

?? 「気にすることはないよ。ただ、次からは軽々しくそういつこ
とは言わないようにね」

?? 「……うん」

?? 紅はうなずくと、管理人さんに向き直り、頭をさげた。

?? 「ごめんなさい、管理人さん」

?? 「え、あ、うん」

?? 管理人さんはまだ悩んでいたが、とりあえずそう答えることが
できた。

?? 「……さて、食事を続けようか」

?? 「そうだね、夜おじちゃん！」

?? 紅は気を取り直して食卓に向かい、食べ始める。他の人たちも、
紅のことを見ながらも食事を再開した。

?? 「……それにしても、これ、とてもおいしいね！　？さすがは
私の紅ちゃん！」

?? 「誰がためえのだ腐れロリコンが」

?? 「……あ、あの、け、圭吾くん、その、あんまり酷い言葉遣い
は……」

?? 「こつでも言わなきゃ紅が危ねえだろ！」

?? 「圭吾お兄ちゃん、女の子に怒鳴っちゃだめ」

?? 「ははは、紅ちゃんの言う通りだな、圭吾君」

?? 「……はいはい。……にしても、うめえな、これ」

?? 「ありがとう、圭吾お兄ちゃん！」

?? だんだんさきほどまでの明るい雰囲気を取り戻しつつあるリビングで、流と管理人さんだけが、いまだ暗い雰囲気を振り払えずにいた。

? ?

第二十話 深夜の会話！

?? 大きな月が輝く夜。軒並荘のベランダに、二人の男女が並んで夜を淡く照らす星々を見上げていた。

?? 「……管理人さん、本当にかまわないんですか？」

?? 二人いる男女のうち、男の方はこの軒並荘に住む極貧大学生、大滝 ？流だった。女の方は同じく軒並荘の管理人さん。

?? 「……その質問は父親としてどうなのかしら、流君」

?? 投げかけられた質問を彼女は軽く批判する。

?? 「だめですか？」

?? 「ダメよ。もし私がダメって言ったらどうするつもりだったの

? ? ？紛争帰りの子は面倒見きれません、って言ったたら

?? 「……」

?? 流はそう言われて、何も言い返すことができなかった。

?? 「正直な話、私には荷が重いのと思うわ」

?? 「で、でも、紅は特に問題があるわけじゃ……」

?? 紅は明るく、人を気遣える。そんな子が問題なんて、あるわけがない。流はそう思っている。

?? 「……それくらいわかってるわ。紅ちゃんに何か問題があるとは思いたくない、ないけど……」

??「そこまで言って、管理人さんは視線を左右に動かし、星を眺める。」

??「……ねえ、綺麗な星だと思わない？」

??「え？　あ、はい」

??急に話題を変えられて、流は戸惑いながらも返事をする。

??「……でも、私達がいるこの星には、綺麗な星を眺めることから許されない人達も、確かにいるのよ」

??「紅が、そのうちの一人だと言っんですか？」

??管理人さんは首をふった。

??「いいえ。きっとあの子は優しく強いお母さんに守られながら過ごしてきたんでしょう。そうでなければあんな風に笑えるはずがないわ」

??彼女は流の顔を見る。彼は管理人さんから何を言われるのか、不安なようだ。それが顔によく出ていた。

??「……でも、そういう人をたくさん見てきたというのも、また事実でしょう。あの子の中に、日本では認められない価値観が存在する可能性だって、否定できないわ」

??「例えば、どんな？」

??流に聞かれて、管理人さんは少しだけ悩んで……口を開いた。

??「人を殺すことをよしとする……。そんな価値観は、平和なこ

「ここでは認められないわ」

?? 「……そんな価値観が、あの子にあるんでしょうか」

?? 管理人さんは遠い目をして流に言う。

?? 「私にはわからないわ。あの子がそうなのか、そうでないのか。……それを見極めるのは私の役目じゃないし、するべきじゃないと思う」

?? 「……じゃあ」

?? 「ええ。それをするのはあなたの役目。父親であるあなたがしなければならぬことなの」

?? しっかりと流をみつめ、彼女は言った。

?? 「もし、『そうであった』としても……。あなたが父親である限り、私はあなたたちを受け入れるわ」

?? 「……はい。僕は父親として、努力します。親子ともども、よろしく願います」

?? 流はその視線をそらすことなく受け、決意をするように言った。

?? 「ふふ、その言葉が聞きたかったの」

?? 管理人さんは優しく微笑んで言った。もう一度仰ぐように月を見上げると、彼女は踵を返し、軒並荘の中に入っていく。

?? 「……がんばってね、お父さん」

?? 「……はい」

?? 振り返りざまの励ましを言うと、管理人さんは今度こそ中に入

った。

??流は一人残り、月夜の空を見る。

??「……深紅。紅」

??冷静で力強かった成瀬。深紅と自分の娘。明るく快活で、軒並荘の皆を和ませるような子供。そんな子が突拍子もない、常識はずれの行動をとるとはどうしても思えなかった。

??「……」

??紅は今肌寒くしていないだろうか。食事をしたあとすぐに眠りについたが、布団を蹴飛ばしてはいないとは限らない。もしかしたら風邪をひいてしまうかも。

??「急ぐ」

??そう思ったら流はいてもたってもいられなくなって、自分の部屋に向かった。紛争帰りだとか、何かおかしいな価値観が刷り込まれていないかだとかはよりかは遙かに、それは流を不安にさせた。

第二十一話　次の朝に――

?? 少女は夢を見ている。

?? 廃墟と荒野がひたすら続く紛争地帯に、彼女はいた。

?? 赤茶けた爆発がそこかしこで起き、ほんの少しの感覚で数十の人が悲鳴をあげ、死んでいく。

?? 彼女はその中を母親に連れられ走っていた。母親は拳銃を片手に、隠れながら先を進む。

?? 少女の隣を走っていた少年は、先ほど流れ弾に当たって物言わぬ骸になった。

??

?? 「……紅！　？大丈夫！？　？怪我はない？」

?? 紅の部分だけ綺麗な日本語で、その他は英語で少女に話しかけた。

?? 「う、うん、おかーさん、私は大丈夫だけど、シユラフ君が、動かなく……」

?? 呆然と少年の遺体を見つめている少女、紅は流暢な英語でそう言った。

?? 「……その子はもう死んでいるわ」

?? 「し……なに？」

?? 「その子は、もう死んでいるわ」

?? 「……え？」

?? もう一度、紅は少年の遺体を見る。さっきまでは見えなかった銃痕が、これ見よがしに赤く目立っていた。

??

??「……………」

??

??紅は目を大きく見開いて……

??「いやああああッ！」

??

??「紅ッ！」

??「はあ、はあ、はあ、お、おとう、さん……………」

??紅は隣にいる父親が心配そうに自分を見つめていることに気付いて、始めて先ほどのことが夢だと気付いた。

??「大丈夫、紅？　？どうしたの？」

??「……………」

??ちよつと怖い夢を見たの。今の紅は、それを言うことすらもおつくうだった。

??「ちよつ、こ、紅？」

??何も言わず、紅は流に抱きついた。お腹に頬ずりしながら、肉親の温もりを逃がさまいと、抱きしめる手をさらに強くする。

??「……………おとーさん。怖い夢、

見たの

?? 「……………」

?? 流は何も言わず、紅を抱きしめ返した。

?? 「……………怖い夢を見た時の夢を見たの」

?? 紅にとって、怖いことは全部夢の中の出来事だった。そうでも思わなければ、紅は昨日のように明るく笑えなかつただろう。現実と認めてしまえば、紅は笑えなくなるかもしれない。

?? 「そう。でも、それは夢だよ。ここが、今僕が抱き締めている君が、現実の君だよ」

?? 「……………ありがとう、おとーさん」

?? 紅はお礼を言うと、もう一度眠りについた。

?? 「……………怖い夢を見て泣きついてくるなんて、子供らしいこともあるじゃないか」

?? 夢の内容を知らない流は、呑気にそんなことを思った。

?? 「……………くっ」

?? 「……………すっ」

?? 夜は更けていき、やがて日が昇り始める。現在時刻午前六時。
?? 軒並荘の庭では、いつものように管理人さんが竹箒片手に玄関先を掃いていた。

?? 「おはようございます、管理人さん」

??

??そこへ、やはり毎日のように圭吾がやってきて、朝の挨拶をした。

??「あらおはよう。今日も早いのね」

??「早寝早起き三文の得、ということわざに従っているだけです
よ」

??心にもないことをいいながら、圭吾は管理人さんのそばに寄る。

??「賢いのね」

??「ありがとうございます。……にしても、昨日は流の奴と遅くまで話してたみたいっすけど、どうかしたんすか？」

??「ふふふ、気になる？」

??淡く微笑んで、管理人さんは言った。

??「……い、いや、なんでもないっす」

??とたんに圭吾は顔を赤くし、管理人さんから目をそらした。

??「あ、圭吾お兄ちゃんに管理人さん！」

??その時、鈴のような声が二人の耳を震わせた。

??「あら、おはよう紅ちゃん」

??「ちつ……。よう、紅」

??管理人さんは親しげに、圭吾は投げやりに挨拶した。

?? 「うん、おはよう！　？ねえねえ、今日も学校あるの！？」

?? ぱあつと、輝くような笑顔で紅は聞いた。学校が楽しみで仕方がないのだろう。

?? 「ええ。土曜日と日曜日以外は毎日あるわよ」

?? 「やった！」

?? あまりのうれしさに紅はその場でぴよんぴよん飛び跳ねた。

?? 「なあ、紅。なんでこんなに早く起きてんだ？」

?? 「え？」

?? 飛び跳ねるのをやめて、紅は聞き返した。

?? 「だからさ、なんでお前、こんな時間に起きてんだよ？」

?? 「……？　？早い、かなあ……？　？私、ゆっくり起きたつもりだよ？」

?? 「そ、そうか。賢いな」

?? 意外な答えに圭吾は少したじろいだ。つとめて冷静に彼は反応した。

?? 「賢い？　？……えへへ、ありがとう」

?? 褒められたことに気付くと、紅は頬を赤らめた。

?? 「紅ちゃん、朝ご飯どうする？」

?? 「え、食べれるのっ！？」

??びつくりしたように紅は言ったが、管理人さんは言葉の内容にびつくりした。

??「た、食べさせないと思ってたの……?」

??「う、ううん、そういうことじゃなくて、こはんそんなにあるのかな、って」

??「あるに決まってるんだろ。ここをどこだと思ってんだ」

??「日本だよ」

??にまーつと笑いながら、紅は言う。

??「なんだよ、急に笑って」

??「ちよつと思ひ出したの!」

??「……なにをだよ」

??「この国がすつごく物に溢れてる幸せな国だって!」

??「物にあふれてたら幸せってことはねえだろ?」

??「違うよっ!」

??紅は少しむつとした表情になって言った。

??「ものにあふれてる、ってことはものがないくるしみをしらないってことだよ! だから、ものがないくるしみをしってるひとよりは、しあわせだよっ!」

??「……受け売りだろ、それ?」

??「う……」

??凶星を言い当てられ、紅はのけぞった。

??「意味わかってんのか?」

??「う、うん! ?意味わかってるもん!」

??口ではそう言っているが、紅の表情は明らかに動揺していた。

??「まあまあ、二人とも。さ、私はそろそろ朝ご飯の準備をするけど、紅ちゃんはどうする?」

??「え、あ、う、うん! ?手伝うよ、管理人さん!」

??管理人さんは軒並荘の中に入り、紅もそれに続いた。

??「………つたく、またあいつのせいで管理人さんとの大事な時間が………ブツブツ………」

??しかめっ面をしながらも、圭吾は軒並荘の中に入っていった。

??それから三十分後、軒並荘の住人の大半が起床した。

第二十二話　紳士的だった彼！

?? 九時ごろになっても、軒並荘の住人はほとんど軒並荘にいた。

?? 管理人さんはもちろんだが、不登校の圭吾、登校拒否の蛭、職業不明の好助、小説家の夜。まともに就学しているのは極貧大学生の流と紛争帰りの紅だけである。

?? そんな状況だが、管理人さんは彼らをまともな学生、まともな社会人にするつもりは全くなかった。

??

?? 「だから、僕は紅ちゃんに邪な想いを抱いているわけではなく、純粹にだね……」

?? 「信じられるかこのクサレがつ！」

?? 管理人さんの後ろでは、この頃急に欲望をさらけ出すようになった好助と、紅を実兄のように守ろうとする圭吾が言い争いをしていた。

?? 「く、クサレとは言い過ぎではないのか!？」

?? 「言い過ぎなわきゃねえだろ！ この犯罪者予備軍！」

?? 「確かに紅ちゃんも犯罪的な可愛さだが」

?? 「てめえもう黙れ！」

?? ……ふう。

?? 管理人さんは二人の争いを背に、ため息をついた。

?? 「……ど、どうかしたんですか？」

?? 「え？ いや、なんでもないのよ、蛭ちゃん」

?? 管理人さんを心配して話しかけてきたのは、とある理由から不

登校となっている高校一年生、小河　？ 蛭だった。彼女は圭吾と違って学校に行かないことに罪悪感を感じており、故に暗い雰囲気を常に振り撒いてしまっているような少女だった。

?? 「ほ、本当ですか？」

?? 「ええ。ちょっと後ろの二人がね……」

?? 管理人さんは一度嘆息すると、再び彼らに視線を移した。言い争いは、小説家の中年男性大月　？ 夜が止めていた。

?? 「二人とも、そろそろやめないかね？　？ 喧嘩などしても、いいことはないぞ」

?? 「いいや！　？ 夜さん、こいつは言わなきゃダメなんだ！　？ このロリコンだけは絶対！」

?? 「私はロリコンではない！　？ 偶然タイプの女性が幼女だっただけで、それが日本では偶然犯罪だっただけで」

?? 「それをロリコンってんだ馬鹿野郎！」

?? 「それをロリコンと言うのだよ、好助君」

?? 仲裁する側だった夜さえも厳しい口調で言った。

?? 「……なんだか、好助さん様子変わりましたね」

?? 「ええ、全くよ」

?? 女性二人はがっかりしたように言った。紅が来る前から好助は子供がタイプだ、などと言っていたが、それは方便だと二人は信じて疑わなかった。普通なら引かれて終わりなところをそうならなかったのは、ひとえに好助の紳士らしさ故だった。

?? 「好助さん、本当に子供が好きなんですな」

??それも、悪い意味で。

??「まったく、ちよっと幻滅、ね」

??「ですわね」

??二人は仲良く肩を落とした。

??二人は別に好助が好きだったというわけではなく、純粹に尊敬していたのだ。優しく、紳士的で、下心はない。そんな彼に、二人は憧れさえ抱いていた。

??「……ああ、紅ちゃん早く帰ってこないかなあ……。新しい服作ったのになあ」

??「てめえもう黙れ。殺すぞ」

??そんな人間がこうなってしまうば……。誰だって、落胆してしまおうだろう。

??「私は黙らない！　？ただひたすらに紅ちゃんへの愛を叫び続けるのだ！　？ふはははははははははは！」

??女性二人の評価が地ほどに落ちぶれた元『無毒』は、そんなこともまるで気にせず馬鹿笑いを続けていた。

??「……やれやれ」

??軒並荘の住人のほとんどが、そう思った。

??

?
?

第二十三話 お昼休み！

それから、時間と場所は飛んで昼、紅が通う小学校。そのグラウンド。

「……………」

小学校にしては広めのグラウンド……校庭では、たくさんの子供たちが活発に遊んでいた。ボール遊びをする小学一年生、校庭の端に備え付けられた遊具で遊ぶ小学二年生、サッカーをして遊ぶ他学年。

そんな中で、紅は一人、校舎の壁に背をつけて、その様子を鼻歌を歌いながら眺めていた。楽しそうに、愛おしそうに。

「紅ちゃん！ 何してるの？」

「……………あ、ミドリちゃん」

紅は近づいてきた風見に、人のよさそうな笑顔を向けた。風見は他の女子生徒も何人か連れており、グループで遊ぶ心づもりらしかった。

「遊ぼうよ！ 私、いろんな楽しい遊びを知ってるんだ！ 一緒に来て！」

「……………でも、私転校してきたばかりだし……………」

不安そうに、紅は断った。迷惑をかけるくらいなら、遊ぶ必要なんてない……………。そんなニュアンスがこもった言葉だった。

「大丈夫！ ちゃんと、そこら辺は考えてるから！」

太陽のように微笑んで、風見は言った。他の生徒もつなずく。

「……うん！」

不安そうだった紅は一転、ひまわりのように明るくなった。その様子に満足した風見は、うんうんとつなずいて、紅の手をとった。そのままゆっくりと歩き出し、紅を連れ出す。

「どこへ行くの？」

「広いところ。鬼ごっこやろうかな、って思ってた」

「……鬼ごっこ？」

紅の耳には聞きなれない単語だった。どんな遊びだろうと内心わくわくしながら、紅は聞いた。

「『鬼』を一人決めて、その『鬼』から、『鬼』以外の人を逃げる。つかまったら『鬼』を交代する。簡単でしょ？」

「あゝ……うん、そうだね」

走って逃げるだけの遊びだ、と紅は思った。

校庭の広いところまで来ると、風見は紅の手を離して、周りの生徒たちに言う。

「じゃ、始めよっか！ じゃんけん……」

風見の号令で、みんなは出す手を頭の中で考える。

「ばん！」

その合図と共に、皆は一斉に手を出した。

「……あ」

負けたのは紅、風見、そしてもう一人の女子生徒、陽木 昇子だった。

「よし、昇子、紅、勝負！ じゃんけん、ポン！」

三人はとっさに手を出し……最終的に鬼になったのは、風見だった。

「うわあ……負けちゃったか。ま、いいや。じゃあ、十数えるから、逃げてね」

そう言つと、風見は目を閉じて数を数え始める。

「い〜ち」

数え始めたのを確認すると、紅以外の生徒はみんな、一目散に逃げ始める。紅は流れをつかんでいないので、逃げ遅れたのだ。

「……あ」

遅れて、紅もゆっくりと走る。何の危機も迫っていない今、紅は真剣に走ることができなかった。非常時のために体力を温存しておこう、そう考えたのだ。

「きゅー、じゅー！」

数え終わると、風見は目を開け、逃げた生徒たちを見まわし……
一番近くにいた紅を標的に定めた。彼女はゆっくりと走っていたた
め、格好の標的であった。

「紅ちゃん……！ 遠慮はしないよ！」

叫んで、風見は走った。紅はその声にはっとなり、後ろを振り向
く。

「え」

完全に油断していた紅は、迫ってくる風見に気付いて、ようやく
本気で逃げ始めた。

「……うそっ、早ッ……！」

クラス一の俊足である風見に負けず劣らずの速度に、彼女は驚く。
しかしそれは一瞬で、すぐに『鬼』らしく捕まえにかかる。

「まて〜！」

「待たない！」

今、『鬼ごっこ』は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8702i/>

お父さんになっちゃった!?

2011年3月8日22時34分発行